

古 免 遺 跡 芝 宮 遺 跡

長野県小県郡丸子町古免・芝宮遺跡発掘調査報告書

1989. 3

長野県小県郡丸子町教育委員会
長野県上小地方事務所

序

丸子町塩川地区の通称塩川沖と呼ばれる一帯は、昔の圃場整備の跡・条里的遺構の存在もあり、町内で最も広くかつ平坦な水田地帯として知られ、重要な稲作地帯となっていました。農業の近代化を求める地元農家の皆さんの要望をうけ、県営圃場整備事業が大規模に実施されることになりました。

この圃場整備事業により、区域内の埋蔵文化財包蔵地、古免遺跡及び芝宮遺跡の一部分が破壊されますので発掘調査をして記録保存を図ることとなり、事業主体である上小地方事務所より委託を受けた丸子町教育委員会では、丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団を組織して調査を委託しました。

この結果、古免遺跡からは縄文時代～近世にかけての様々な遺構遺物が発見され、また芝宮遺跡からは、芝宮に砦があったことを裏付けるような空堀跡が発見されるなど、この地方の地方史解明に重要な成果をあげることができました。

調査に従事された調査団の皆さんや、調査に御協力いただいた長野県教育委員会、長野県史刊行会、長野県埋蔵文化財センター、東京都東北新幹線赤羽遺跡調査会、丸子町役場農林課や地元南方区の皆さんなどに、厚くお礼を申し上げます。

平成元年3月

丸子町教育長 田村 虎雄

例 言

- 1 本書は、長野県営塩川沖圍場整備事業昭和63年度事業に先立ち実施された、古免遺跡及び芝宮遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 出土遺物の整理は調査員全員で行い、遺物実測図は滝沢敬一・綿田弘実・千葉剛成が作成し、トレースは滝沢・綿田・竹内が担当した。また遺構図及び図版、原稿の作成は滝沢敬一が行ったが、縄文時代の遺物図版、原稿は綿田が作成した。
なお編集は関孝一が中心になり、滝沢・竹内・郷道・綿田・赤松・千葉で実施した。
- 3 挿図の縮尺はそれぞれに明示してある。
- 4 この調査にあたっては、下記の方々ならびに諸機関から御指導・御協力をいただいた。御芳名を記し、感謝の意を表したい。

(五十音順・敬称略)

〔機関〕 (財)長野県埋蔵文化財センター、東京都東北新幹線赤羽地区遺跡調査会、長野県教育委員会文化課・長野県史刊行会、丸子町役場農林課、丸子町南方区

〔個人〕 郷道哲章・寺内隆夫・中村敏生

- 5 本調査に関するすべての資料は丸子町教育委員会が保管している。

目 次

序	1
例 言	Ⅱ
目 次	Ⅲ
第 1 章 発掘調査の経過と遺跡の環境	1
I 調査に至るまでの経過	1
1 発掘調査に至るまでの経過	
2 発掘調査団の構成	
3 発掘調査口誌	
4 発掘調査区の設定と調査方法	
II 遺跡	6
1 遺跡の立地	
2 遺跡の状態及び層序	
3 歴史的環境	
第 2 章 古免遺跡	12
I 遺構	12
1 住居址	
2 ビット群	
3 土壌	

Ⅱ 遺物	14
1 遺物の概観	
2 第Ⅰ区出土遺物	
3 第Ⅱ区出土遺物	
4 縄文土器、石器	
第3章 芝宮遺跡	32
Ⅰ 遺構	32
Ⅱ 遺物	32
第4章 まとめ	35
Ⅰ 古免遺跡	35
Ⅱ 芝宮遺跡	36

■挿図目次

第1図	古免遺跡第Ⅰ区グリッド配置図
第2図	古免遺跡第Ⅱ区グリッド配置図
第3図	芝宮遺跡グリッド配置図
第4図	遺跡付近地形図
第5図	調査遺跡周辺遺跡分布図
第6図	古免遺跡土層柱状図
第7図	芝宮遺跡溝及び土塁断面図
第8図	遺構配置図
第9図	1号住居址実測図
第10図	遺構実測図 (1)
第11図	遺構実測図 (2)
第12図	第5・6号ピット実測図
第13図	古免遺跡遺物実測図 (1)

- 第14図 古免遺跡遺物実測図 (2)
 第15図 古免遺跡遺物実測図 (3)
 第16図 縄文土器拓本図、石器実測図
 第17図 芝宮遺跡溝実測図
 第18図 芝宮遺跡出土遺物実測図

■表目次

- 第1表 調査遺跡周辺の遺跡地名表
 第2表 1号ビット群ビット一覧
 第3表 ビット一覧
 第4表 古免遺跡遺物観察表
 第5表 芝宮遺跡遺物観察表

■図版目次

- P L 1 1 古免遺跡発掘調査前(東から) 2 表土はぎ
 P L 2 1 遺跡遠景(南から) 2 遺跡遠景(西から)
 P L 3 1 Ⅱ区全景(東から) 2 Ⅱ区遠景(西から)
 P L 4 1～8 発掘風景
 P L 5 1 Ⅰ区土層断面(S₁) 2 Ⅰ区土層断面(S₂)
 P L 6 1 Ⅱ区土層断面(S₃) 2 Ⅱ区土層断面(S₄)
 P L 7 1 Ⅰ区全景(西から) 2 Ⅰ区全景(東から)
 P L 8 1 1号住居址(南から) 2 1号住居址遺物出土状態
 P L 9 1 1号土壇 2 1号土壇遺物出土状況
 P L 10 1 2号土壇(東から) 2 1号ビット群
 P L 11 1 5号ビット 2 6号ビット
 P L 12 1 Ⅰ区遺物出土状態 2 Ⅰ区遺物出土状態
 P L 13 古免遺跡出土遺物 (1) 第13図
 P L 14 " (2) 第13・14図
 P L 15 " (3) "
 P L 16 " (4) 第14・15図
 P L 17 " (5) 第15図
 P L 18 1 線刻を有する土師器杯 2 線刻を有する土師甕
 P L 19 1 芝宮遺跡遠景(西から) 2 芝宮遺跡遠景(北から)
 P L 20 1 芝宮遺跡発掘状況(北から) 2 芝宮神社
 P L 21 1 土壇検出状況(北から) 2 土壇検出状況(南から)
 P L 22 1 芝宮遺跡土層断面図(A) 2 芝宮遺跡土層断面図(B)
 P L 23 芝宮遺跡出土遺物(第18図)

第1章 発掘調査の経過と遺跡の環境

1 発掘調査の経過

1 調査に至るまでの経過

長野県小県郡丸子町塩川地区には、千曲川により形成された「塩川沖」とよばれる丸子町でもっとも広い平坦地がある。昭和58年度からこの地区で県営圃場整備事業が実施されることになり、事業開始に先立って実施された埋蔵文化財分布調査結果にもとづき昭和56年事業主体である長野県東信土地改良事務所（現・上小地方事務所土地改良第2課）と、長野県教育委員会文化課、丸子町教育委員会及び丸子町役場農林課の4者により区域内の埋蔵文化財の保護協議がなされた。協議の結果、5遺跡の発掘調査と2遺跡の立会調査をすることになり、すでに昭和58年度「稲羽北遺跡」、昭和59年度「市の町遺跡」「塩川条里的遺構遺跡」の発掘調査が実施された。また工場団地・住宅団地造成に伴って昭和60年度「太鼓岩遺跡」「古免南遺跡」、昭和61年度「井戸遺跡」の発掘調査も行われた。

本年度は当初、「古免遺跡」を1200万円の予算で調査する計画であったが、工事区域の変更に伴う遺跡内工事該当面積の減少などの理由で、予算が900万円に減額され、また「芝宮遺跡」を80万円の予算で発掘調査することが昭和62年12月に新規に定められた。その後遺跡をできるかぎり現状のまま上盛保存するため工法の変更などを検討し、「古免遺跡」300万円、「芝宮遺跡」80万円の380万円で発掘調査を実施すること、「庄田原遺跡」立会調査を実施することになった。

調査費は、その72.5%を事業主体である上小地方事務所が、27.5%の地元負担分を文化庁及び長野県教育委員会の補助金を受けて丸子町教育委員会が負担した。また調査は、上小地方事務所の委託を受けた丸子町教育委員会が発掘調査団を組織して再委託した。

調査は事業主体側の工事計画や、調査員・作業員の協力を得られやすい時期を考慮し、7月に実施した。調査に至るまでに2回の調査団会議と文化財保護法98条の2第1項の規定に基づく通知、事業主体と教育委員会・教育委員会と発掘調査団との委託契約の締結などを行った。

2 発掘調査団の構成

発掘調査に先立って編成された、昭和63年度丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団は次のとおりである。

〔調査団〕 (五十音順)

参 与 五十嵐幹雄, 小林重義, 塩入秀敏

団 長 関 孝一

調査 主任 滝沢敬一

調 査 員 井上良子, 川村寿一, 北沢けさ子, 佐々木多四郎, 清水啓道, 塚越安広, 都築誠, 中村武人, 宮沢博家

特別調査員 赤松 茂, 綿田弘実

調査補助員 千葉剛成, 成沢みつ子

作 業 員 井上晴美, 茨木宏則, 今井雄司, 大井博志, 掛川伸一, 金井雅文, 北沢ケサミ, 北沢政樹, 北沢政幸, 小林隆之, 斎藤房邦, 笹川大也, 下村 聖, 関 文敏, 高木芳則, 武井勝巳, 田中 透, 塚越達之, 塚田義昭, 戸堀裕紀, 豊田尊幸, 橋詰貴弘, 樋口 祐, 藤森弘美, 藤森正人, 藤森美保子, 宮下朋之, 横山勝也, 横山信男, 横山礼次郎, 吉池義雄

〔事務局〕

事 務 局 長 小林健一

事 務 局 員 竹内一徳

監 査 員 滝沢 暁

3 発掘調査日誌 (P L 1・4)

4月23日(土) 晴れ 午後6時から丸子町公民館において発掘調査団会議を行う。発掘調査団結成。

4月25日(月) 晴れ 古免遺跡の範囲確認のためグリッドを5ヶ所設定し、試掘調査を行う。

7月18日(月) 晴れ 午前中古免遺跡の発掘区の確認と発掘調査区域の設定(農林課職員同行)を行う。

7月21日(木) 晴れ 午前中発掘器材の運搬を行う。

7月22日(金) 晴れ 古免遺跡でバックホーを使って、表土はぎを行う。

7月23日(土) 晴れ 午前中古免遺跡の表土はぎの続きとグリッド杭打ちを行い、午後芝宮遺跡のグリッド杭打ちを行う。

7月24日(日) 曇り 本日より発掘調査を開始する。作業に先立って結団式が行われ、教育委員会から滝沢社会教育課長が参加する。終了後、5班にわかれⅠ区西側から掘り下げを行う。Ⅰ区中央部分に遺物の集中が見られた。

7月25日(月) 曇り Ⅰ区中央部の掘り下げを行う。住居址のカマドと思われる遺構を確認する。午後バックホーを投入し、表土のはぎたりない部分を掘り下げる。また、工事の関係で遺跡の南方に発掘区(Ⅱ区)を設定し、バックホー

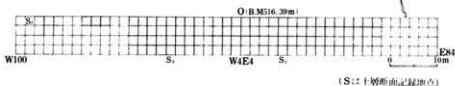
にて表土はぎを行う。Ⅰ区の測量と写真撮影を行う。

- 7月26日(火) 曇り Ⅰ区の遺構の掘り下げと写真撮影を行う。午後、Ⅱ区のグリッド杭打ちを行う。
- 7月27日(水) 曇り Ⅰ区の遺構掘り下げと、Ⅱ区の掘り下げを行う。また、並行して遺構の測量を行う。
- 7月28日(木) 雨 朝からの雨のため発掘調査を中止し、遺物の水洗いを行う。
- 7月29日(金) 曇り 昨日の雨で遺跡の土の状態が悪く、発掘調査は中止した。調査員が古免遺跡Ⅱ区と芝宮遺跡の水抜きを行う。午後芝宮遺跡のグリッド杭打ちを行う。
- 7月30日(土) 晴れ 午前中古免遺跡の遺構検出作業を行う。遺跡中央部から住居址が検出された。遺跡東側のグリッドを掘り下げ、遺構の確認を行う。並行して住居址の掘り下げを行う。午後Ⅱ区の黒色土層を掘り下げる。終了後、芝宮遺跡へ器材を運搬し、古免遺跡の遺構の測量を行う。
- 7月31日(日) 晴れ 古免遺跡Ⅱ区の掘り下げの続きと排土整理に1班を残し、残りの班は芝宮遺跡の掘り下げを行う。並行して古免遺跡の測量と写真撮影を行う。午後古免遺跡Ⅱ区の土層の実測を行う。
- 8月1日(月) 晴れ 芝宮遺跡の掘り下げと並行して古免遺跡の測量と全体写真をとる。午後、芝宮遺跡の全体測量と遺構の測量並びに写真撮影を行う。午後5時機材を撤収し、発掘調査を終了する。
- 8月2日(火) 晴れ 午前中出土遺物の水洗いと芝宮遺跡の全体写真、土層図を作成する。また、古免遺跡の遠景をとる。午後引き続き水洗いを行い、水洗いを終了する。
- 8月3日(水) 晴れ 遺物の注記と並行して接合を行う。午後5時から南方公民館において古免、芝宮遺跡の説明会を行う。(20名出席)説明会終了後調査団会議を開き、執筆分担を決定する。
- 8月4日(木) 晴れ 遺物の注記と接合を行う。終了後器材の整理を行う。

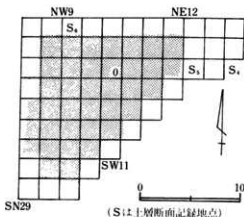
4 発掘調査区の設定と調査方法(第1・2・3図)

(1) 古免遺跡

昭和56年8月の詳細分布調査の際に試掘を行いⅠ層から土師器、須恵器、灰釉陶器の破片の出土と、住居址状の落ち込みが見られた。さらに、昭和63年4月に遺跡の広がりを見るため2m四方の試掘坑を設定し、試掘調査を行った。その結果、八重原に通じる道路と塩川沢の間の花井栽培等が行われている畑付近に遺跡の中心があることが確認された。いっぽう畑周辺の水田からは遺物が出土しなかった。



第1図 古免遺跡第1区グリッド配置図



第2図 古免遺跡第2区グリッド配置図

当初、発掘調査の範囲は、この畑地のほぼ全域であったが、丸子町役場農林課と協議し、盛土工法をとって遺跡の保存がはかれることとなり、永久構造物である農道予定地のみを発掘することとなった。

調査区は全て畑地となっており、調査区は重機による表土はぎの後設定した。調査区が東西90m、南北8mの農道予定地のため東西90mのほぼ中心に基準杭を設定し、調査の便宜上、南北軸は磁北に合わせず、農道に直交する線を南北軸として設定した。そして、調

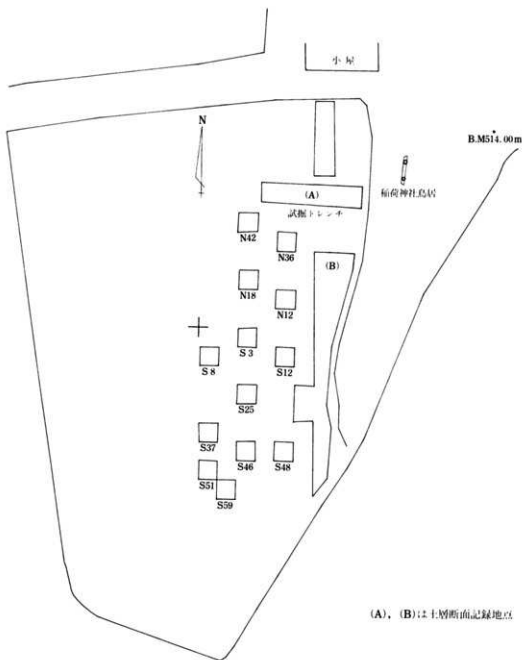
査区の中を2m四方のグリッド180区に区分し、基準杭から東をEグリッド、西をWグリッドとし、それぞれE-1～84、W-1～96の番号をつけた。ただし、試掘確認調査の所見や、地形との関係から、調査区の西限はE-60グリッドまで、東限はW-48グリッドまでとし、その外側のグリッドは排土場所とした。

まず全域にわたって遺構の確認を行った結果、W-1～44、E-1～24に遺構が集中し、その他の部分は遺構の分布が乏しいことが確認されたので、遺構集中部分の調査に主力を置くこととした。

その後、圃場整備の工事の工法土土を削る箇所が出てきたため、最初の調査区の南方約40mの畑地を新たに調査区を設定した。そこでこの調査区をⅡ区とし、最初の調査区をⅠ区とした。Ⅱ区は重機による表土はぎの後、東西20m、南北18mのほぼ中央に基準杭を設定した。基準杭から磁北を通る軸とそれに直交する軸を基準に調査区の中を2m四方のグリッド62区画に区分し、基準杭からの北西区をNW、北東区をNE、南西区をSW、南東区をSEとした。Ⅱ区では黒褐色土層の面まで掘り下げたが遺構はまったく確認されなかった。その結果、発掘調査面積はⅠ区では468m²、Ⅱ区は148m²となった。

なお、遺物の取り上げと注記は、遺構に伴うものは遺構ごとに、それ以外のものはグリッドごとに処理した。また遺構等の測量は平板測量によりベンチマークは標高点（標高527.0m）を用いた。

(2) 芝宮遺跡



第3図 芝宮遺跡グリッド配置図

昭和62年12月に重機により試掘確認調査を行い、稲荷神社参道の南側の水田から苔の空堀跡と考えられる溝が検出された。そのため苔に付随する施設が検出されることが予想されたので、稲荷神社参道南側の水田の東西10m、南北50mの範囲を遺跡として想定し、発掘調査を行った。

調査地区は全て水田となっており、重機による表土はぎの後、調査地区の西限の南北42mのほぼ中心に基準杭をおき、調査区を設定した。調査区は南北が長軸となる長方形となったため、基準杭から磁北を通る軸とそれに直交する軸を基準に調査区の中を2m四方のグリッド158区画に区分し、基準杭から北をNグリッド、南をSグリッドとし、それぞれN-1～95、S-1～64の番号をつけた。

調査はまず土塁とおもわれる遺構に沿ってグリッドを南北方向に掘り下げた。土塁の補強に使ったとおもわれる円礫が所々くずれて検出され、またその付近から内耳土器が5点出土した。

さらに、遺跡の広がりを見るために13箇所のグリッドを掘り下げたが、遺構が確認されなかったため、溝の検出に調査の主力を置くこととした。N62、63グリッド北壁とN30、31グリッド北壁の2箇所の土層を精査した結果、幅220～245cm、深さ10～17cmの溝が検出され、土塁に沿って空堀が堀り込まれていることが判明した。この結果、発掘調査面積は約140m²となった。

なお、遺構等の測量は平板測量によりベンチマークは三角点(標高514.0m)を用いた。

Ⅱ 遺跡

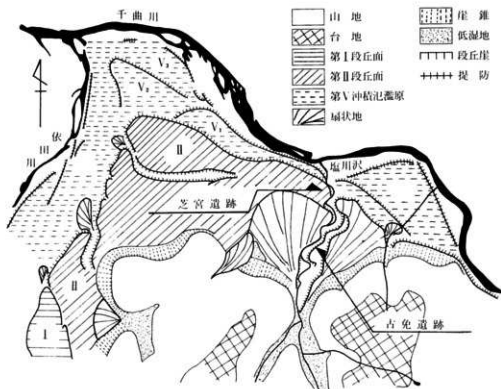
1 遺跡の立地(第4図・5図、PL2・3)

古免遺跡の所在地は、長野県小県郡丸子町大字塩川字古免である。遺跡の西北にかけて流れている塩川沢は、遺跡付近では、千曲川の形成した第Ⅱ段丘面の塩川面(塩川沢左岸)・丑田原面(同・右岸)上に塩川扇状地を作り出し、幅100mに及ぶ大峡谷を作り、峡谷内を蛇行しながら千曲川に至っている(第4図)。

この峡谷内には2段の河岸段丘が形成されており、段丘面上には藤森塚古墳を始めとする遺跡が点在し、今回発掘調査した古免遺跡もこの段丘面上(高位の第Ⅰ段丘面上)にある。

遺跡北方は比高差約10m前後の崖で大湾曲した塩川沢に接し、西方は比較的ゆるやかな傾斜をもって塩川沢に接する。また、東方は2段に連なる高原性隆起台地、藤原田面・八重原面に連続する山地で、山地下方は崖斜面になっており、その直下を上堰の末流が流れる。南方は、塩川沢の湾曲部と微段丘によって隔てられて昭和60年(1985)に発掘調査された古免南遺跡がある(第5図)。

遺跡の付近は耕作に伴う人工の手が長期間にわたり加えられており、複雑な微地形が見られる。以上のように遺跡は塩川沢に隣接する微高地にあり、水の乏しい地帯である塩川地区の中でも絶好の居住条件を備えていたと思われる。

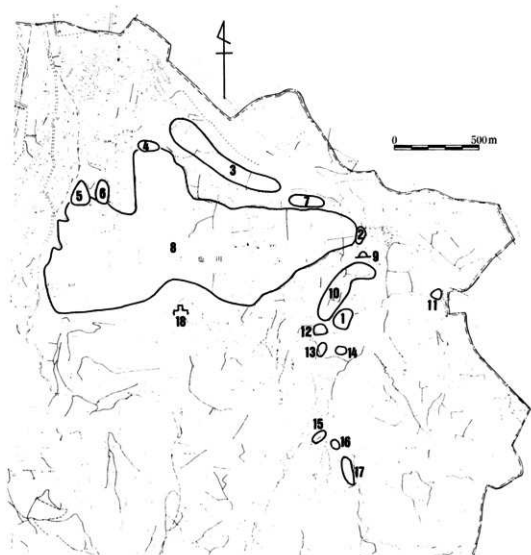


第4図 遺跡付近地形図

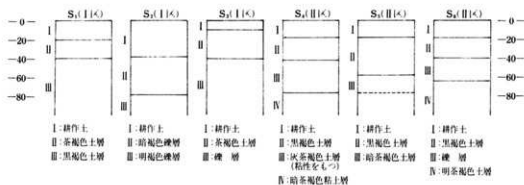
一方、芝宮遺跡の所在地は長野県小県郡丸子町大字塩川字芝宮である。千曲川の河岸段丘の第Ⅱ段丘面の東端にあり、遺跡の南北にかけて塩川沢が比高差約10mの深い峡谷をつくり、千曲川に注いでいる。遺跡の南側の峡谷の中には、まえに述べた藤森塚古墳が築かれている。また、西側は広大な条里水田が広がっており、古くから要害の地として重要視されていたと考えられる(第4図・5図)。

2 遺跡の状態及び層序(第6・7図、PL5・6・22)

まえに述べたとおり古免遺跡は、塩川沢が形成した高位の河岸段丘面上にあり、本調査に先立って実施した詳細分布調査及び試掘調査の結果をふまえて想定した遺跡の範囲は、塩川地区松葉集落のはずれから南へのびる農道の西側から塩川沢までの、南北約200m、東西約130mの範囲内であった。しかし、丸子町役場農林課との協議の結果、盛土工法をとることにより保存が図られることとなり、永久構造物である農道予定地のみを発掘することとなった。そのため当初東西90m、南北8mの発掘区を設定し(Ⅰ区)、調査を進めたが、工事の関係でさらに遺跡の南縁にあたる地点に東西20m、南北18m、北東-南西23mの三角形の調査区(Ⅱ区)を設定した。



第5図 調査遺跡周辺遺跡分布図



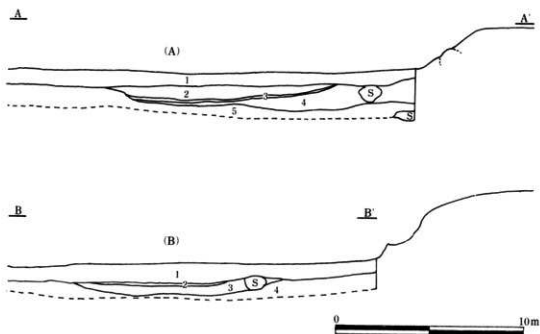
第6図 古免遺跡土層柱状図

全調査区のうち、土層断面を記録したのはⅠ区3地点、Ⅱ区3地点の計6地点である。

遺跡内の土層は第6図のとおりであるが、Ⅰ、Ⅱ区とも西方に行くに従い地山面が高くなっており、塩川沢に近い西側に自然堤防が形成されていたと思われる。調査区西縁の地山面は地表下30cmと浅くなっており、その下は川床の礫層となっている。

調査はバックホーを使い表土を除いた後、掘り下げを行った。しかし、遺跡付近では、薬用人参栽培が盛んに行われており、遺物包含層から地山面にかけて随所に攪乱が見られた。

また芝宮遺跡もまえに述べたとおり千曲川がつくった河岸段丘（第Ⅱ段丘面）上に位置し、本調査に先立って実施した詳細分布調査の結果にもとづき想定した遺跡の範囲は稲荷神社参道南側の東西13m、南北50mの範囲内であった。ところが、試掘調査の結果、参道の南側の水田から空堀跡と思われる溝が検出され、砦の防衛ラインがほぼ想定できたので、発掘面積を縮小し、東西10m、南北50mの発掘区を設定した。全調査区のうち土層断面を記録したのは2地点である（第7図）。長期間水田となっていたと思われ、全体にしまりがよく粘性に富んだ粘土質の土が堆積している。空堀跡と考えられる溝はⅡ層の溶脱層から20cm位の厚さで、



- (A) 1層：溶脱層(灰褐色土層)しまりがよく、粘性は少ない。 (B) 1層：溶脱層(灰褐色土層)しまりがよく粘性は少ない。
 2層：溶脱層(灰褐色土層)しまりがよく、粘性に富む。 2層：炭化物堆積層(黒褐色土層)しまりがよく粘性に富む。
 3層：炭化物堆積層(黒褐色土層)しまりがよく粘性に富む。 3層：灰褐色土層、しまりがよく粘性が強い。
 4層：灰褐色土層、しまりがよく粘性に富む。 4層：灰黄褐色粘土層、しまりがよく粘性に富む。
 5層：灰褐色砂礫層、小礫を含み粘性に富む。

第7図 芝宮遺跡溝及び土層断面図

約2.5mの幅で掘り込まれており、土塁と考えられる盛土へつながっている。また、土層の補強に使ったと思われる川原石が所々くずれて散在していた。

3 歴史的環境 (第5図, 第1表, PL2・3・19)

古免遺跡と芝宮遺跡がある塩川地区では、現在までのところ市の町遺跡の発掘調査(昭和59年実施)で出土した縄文時代早期の土器片が最も古い時代の遺物である。しかし、この時期の遺物は市の町遺跡以外では発見されておらず、また遺構はひとつも検出されていないので、人々が塩川地区に定住するようになったのは、縄文時代中期以降であると思われる。

縄文時代中期になると全国的に遺跡の数が急増したことなどから、人口が増加し、人々の行き来も盛んになったといわれているが、塩川地区でも塩川沢に沿って大鼓岩遺跡、東畑遺跡、

第1表 調査遺跡周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
1.	古免遺跡	集落址	〔今回調査〕(縄)中期土器、石鎌(弥)箱清水式(平)住居址1、土壇2、ビッド群1、土師器、須恵器、灰釉陶器(近)陶器
2.	芝宮遺跡	城館跡	〔今回調査〕(中～近・初)土塁、溝、内耳堀、石目
3.	井戸下遺跡	集落址	〔昭和41調査〕(古)竪穴住居6、土壇、土師器、須恵器、滑石製紡錘車、小玉、鹿角
			〔昭和61調査〕(縄)前期、中期土器(古)竪穴住居7、土師器、須恵器、刀子、土製玉(平)竪穴住居2、土師器、須恵器(中・近)土師器系土器、陶器
4.	稲羽北遺跡	集落址	〔昭和58調査〕(縄)石鎌、打石斧(弥)箱清水式(奈・平・中)竪穴住居5、ビッド群3、土壇集2、土壇10、土師器、須恵器、灰釉陶器、羽口、銅銭、土鈴
5.	市の町遺跡	集落址・城跡	〔昭和59調査〕(縄)早・中・後期土器(古)土壇2、土師器、須恵器(奈・平)竪穴住居1、土壇4、土師器、須恵器(中)竪穴住居1、溝2 ビッド群1、白瓷系陶器、土師器系土器、刀子(近)陶器、磁器(一)竪穴住居1、ビッド群7、土壇12、溝1、列石1集石1
6.	稲羽西遺跡	包蔵地	(一)土師器、須恵器
7.	羽毛田遺跡	〃	(縄)石鎌(一)土師器、須恵器
8.	条里的遺構	水田址	〔昭和51～53分布調査、59発掘調査〕
9.	藤森塚古墳	古墳	(古)円墳(径13、高3.1m)、横穴式石室(長6.5、幅1.5、高1.7m)
10.	松葉遺跡	包蔵地	(縄)加曾利E式、堀之内式土器、磨石斧、石鎌、石匙(平)土師器、須恵器(中)土師器系土器
11.	井田原遺跡	〃	(縄)土器(一)土師器、須恵器
12.	東畑遺跡	〃	(縄)中期土器、石棒(一)土師器、須恵器
13.	道祖神遺跡	〃	(縄)中期土器(一)土師器、須恵器
14.	古免南遺跡	集落址	〔昭和60調査〕(一)土壇1、ビッド群1(平)土師器、須恵器
15.	太鼓岩遺跡	〃	〔昭和60調査〕(平)竪穴住居1、土壇1、土師器、須恵器、灰釉陶器
16.	大岩遺跡	包蔵地	(縄)石鎌(平)土師器、須恵器、灰釉陶器
17.	白山沢遺跡	〃	(縄)土器、石鎌(平)土師器、須恵器、灰釉陶器
18.	陣場砦	城跡	(中)40×25m、単郭

松葉遺跡などの小規模な遺跡が点在するようになる。

ところが、縄文時代も中期を過ぎると遺跡の数はふたたび希薄となり、特に弥生時代の遺跡は今のところ発見されていない。このことは千曲川の対岸の東部町や依田川上流の依田窪の他町村から弥生時代の遺跡がいくつか報告されていることと比べて対照的である。

古墳時代になると依田川下流域を中心に遺跡の数が増大し、急速に開発が進められた様子がうかがえる。塩川地区でも同様で、なかでも井戸下遺跡（昭和41年、61年発掘）はその代表的な遺跡である。しかし、水の乏しい塩川面上は開発が遅れ、塩川沢の流域と井戸下面、市の町地籍に遺跡が点在するのみである。

奈良時代になると依田川下流の依田地区では、さらに開発が進み、諏訪田遺跡（昭和55年発掘調査）では掘立柱建物群が出土し、その背後の山麓には古窯址群が存在するなどしており、当時小県郡に創建された国分寺（上田市国分）とのつながりも指摘されている。これに対して、塩川地区では水の乏しい点が災いして開発が遅れたと思われる。なかでも古免、庄田原地籍は塩川地区で最も開田が遅れたところと考えられ（地域開発史）、上郷を延長して全面開田が図られたのは江戸時代に入ってからであった。

この地籍は東をカニ沢、西を塩川沢で区切られ、北は比高差10mの段丘岸、南は田地で区切られているため、古代・中世には牧があったと考えられる。当時の牧の実態についてはよくわからない点が多いが、信濃の牧はほとんど馬牧であったと考えられている。古免遺跡付近は塩川牧に関係する地域と考えられており、放牧した馬を集めておく場所とも考えられ、牧寄せとして絶好の条件を備えていたと思われる。また、平安時代末に木曾義仲が挙兵したと考えられる白鳥河原の対岸に位置し、義仲の軍団の騎馬調達のために、大きな役割を果たしたことも十分考えられる。芝宮砦の記述は小県郡史、町村誌等にも見られ、地元でも古くから「城跡」として言い伝えられているが、築城の時期は不明である。だが、その立地からみて東からの侵入を防ぐ防衛拠点としておそくとも戦国時代には重要な役割を果たしていたと思われる。

やがて江戸時代に入り、本格的な用水堰が築かれ、豊富な水がもたらされると水田地帯へと移行していったものと考えられる。また、芝宮遺跡の中には稲荷神社が祭られており、江戸時代以降は稲作の守神として信仰を集めていたと考えられる。

第2章 古免遺跡

I 遺構 (第8図, PL 7~11)

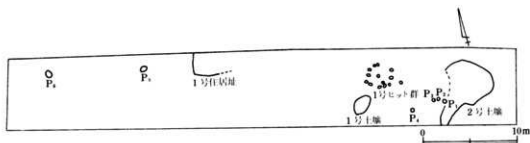
本調査で検出された遺構は、住居址1軒、ビット群1基、ビット6基、土壇2基である。住居址とした遺構は、カマドの跡と考えられる焼土と土器片の集中する箇所をもつ竪穴である。

ビット群はビットの配列が不明瞭であり、1軒の建物として識別はできないが、1カ所に集中しているものである。

土壇はビットよりも大きい掘り込みを称したが、2号土壇のように広大で不明瞭な平面形になるものも含んでいる。

以上の遺構のうち、確実に伴出遺物をもつ遺構は1号住居址、1号・2号土壇に限られ、他の遺構は明瞭な時期を推定するのは困難である。

なお、以上の遺構は全てI区から検出されており、II区からは遺構は検出されなかった。

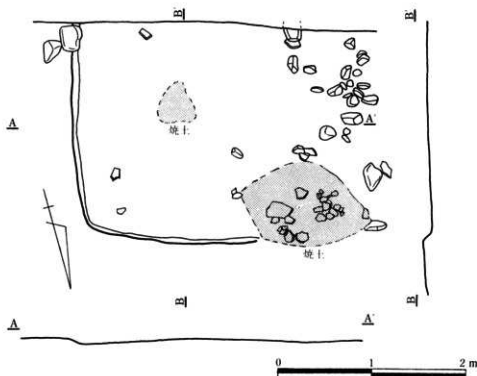


第8図 古免遺跡I区遺構配置図

1 住居址

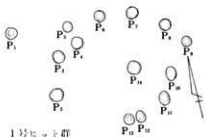
○1号住居址 (第9図, PL 8)

E-15・16・19・20・23・24グリッドに位置する。プランは隅丸方形と思われるが、南壁は調査範囲外で調査できず、西壁は攪乱によって破壊され検出できなかった。また、東壁は調査範囲外で、北壁が攪乱によってそれぞれ一部しか確認されず、住居址の半分以上が攪乱によって破壊されていることになり、規模は不明瞭である。また、ビットは検出されていない。北壁の中央部とおもわれる位置に厚さ5cm前後、長径140cm×短径90cmの範囲で楕円形状に焼土がまばらに堆積しており、カマドの痕跡と考えられる。また、住居址の床面からも焼土が検出された。遺物は少ないが、カマド跡と思われる焼土の上から須恵器甕、土師器甕が出土し、



第9図 1号住居址実測図

床面から須恵器が出土している。



1号ピット群

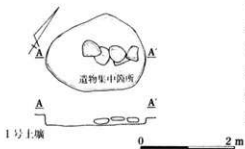
2 ピット群

○1号ピット群 (第10図, 第2表, P L10)

W18・19・20・23グリッドに位置する。規則性を有する14個のピットが検出された。これらのピットは大半が約65～80cmの間隔でP14を中心に不整形円形を呈するように掘り込まれており、円形に近い建物の存在が推定される。ピットの平面形は円形を呈する。遺物はP7から土師器が1点出土しているのみである。

○1・2・3・4・5・6号ピット (第11・12図, 第3表, P L11)

単独で6個のピットが検出されたが、性格は不明である。いずれも遺物未出土していない。



第10図 遺構実測図 (1)

第2表 1号ビット群ビット一覧

(単位:cm)

No	形 状	長径×短径	深さ	備 考	No	形 状	長径×短径	深さ	備 考
P ₁	円 形	24×23	17.5		P ₈	円 形	24×24	9	
P ₂	円 形	30×27	15.5		P ₉	円 形	21×21	9.5	
P ₃	円 形	26×25	12.5		P ₁₀	楕円形	30×24	13.5	
P ₄	円 形	26×25	14.5		P ₁₁	楕円形	30×24	13	
P ₅	円 形	22×20	15		P ₁₂	楕円形	25×20	19	
P ₆	円 形	24×23	6.5		P ₁₃	円 形	24×22	14.5	
P ₇	円 形	26×25	6.5		P ₁₄	円 形	28×28	11.0	

3 土 壌

○1号土壌(第10図, P L 9)

W13・14・17・18グリッドに位置する。163cm×210cmの不整楕円形を呈し、深さ23cmを計る。底面は平坦で、断面形は壁が垂直に立ち上がり、たらい状を呈する。覆土中から平安時代の土師器が7点出土している。また、覆土から平らな河原石が4点出土している。

2号土壌(第11図, P L 10)

W33～36・38～40・42～44グリッドに位置する。プランは一部が張り出す不整楕円形とおもわれるが、東壁は暗渠により破壊され検出できなかった。深さは14cmを計る。底面は平坦で、断面形は浅いたらい状を呈する。1号土壌と比較してかなり大きく、浅い。土壌の中央部の覆土中から平安時代の武蔵型甕が出土している。

II 遺 物

1 遺物の概観(第4表, 第13～16図, P L 12～18)

本調査で出土した遺物総量は整理用平箱6箱程度であった。遺物の時間幅は縄文時代中期から平安時代までの長期間に及んでいる。遺物の種別は以下のとおりである。

縄文土器:中期

弥生土器:後期

土師器:平安時代

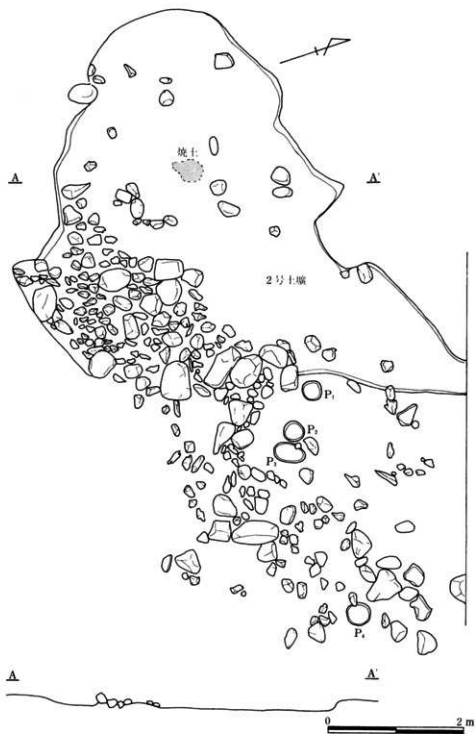
須恵器:平安時代

灰釉陶器:平安時代

その他:石器、刀子、陶器(鉄釉)

これらのうち、量的には平安時代の土師器・須恵器が圧倒的に多く、出土遺物の大半を占めるが、遺構に伴うものは少ない。平安時代以外の遺物も遺構に伴うものはなく、散発的に出土している。また攪乱を受けているため遺物包含層がほぼ1層のみで、層位的に分けられなかった。

なお特殊な例として表面に文字や図を線刻したとおもわれる平安時代の土師器坏と甕が出土



第11图 遺構実測図(2)

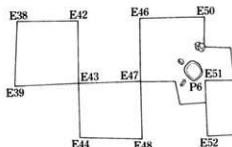
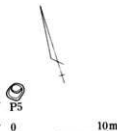
第3表 ビット一覧

(単位 cm)

No	形状	長径×短径	深さ	備考	No	形状	長径×短径	深さ	備考
P ₁	円形	28×28	14		P ₄	円形	36×32	16.5	
P ₂	円形	30×30	19		P ₅	隅丸方形	36×32	18	重
P ₃	楕円形	46×28	20		P ₆	隅丸方形	39×35	21	

している。また、暗文がある高台付皿と坏が出土している。

石器には、石鏃、スクレイパー、などがある。いずれも少数が出土している。



第12図 第5、6号ビット実測図

なお、遺物の配列は原則として遺構単位とし、遺構に伴わないものは種類別に配列した。

2 第Ⅰ区出土遺物 (第13・14・15図, P L13~18)

(1) 1号住居址 (第13・15図, P L13・16)

本住居址からは土師器甕(2)、須恵器蓋(1)、甕(第15図53~58)が出土している。

土師器甕は胴下部~底部が残っている。底部は不安定な平底で、器厚は薄い。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデツケが施される。

須恵器蓋は口縁部の4分の1が残るのみで、つまみの形状は不明である。天井部はゆるやかに内湾して下がり、口縁端部は鋭く垂直に屈曲する。内外面とも回転ナデ調整が施される。

須恵器甕は胴部破片が住居址の焼土付近から出土している。外面に平行叩き目を施し、内面はヨコナデを行っている。時期は平安時代前期に位置するとおもわれる。

(2) 1号土壌 (第13図, P L13・15)

本土壌からは土師器甕(6・7)、小型甕(5)、高台付坏(3・4)が出土している。

甕は平底で口縁部が短く外傾するもの(6)、口縁部がほぼ直立するもの(7)、小型のもの(5)がある。いずれも内外面とも回転ナデ調整を施している。6は類例が小諸市宮ノ北遺跡等にみられ、平安時代前期(Ⅱ期)に位置つくとおもわれる。

高台付坏は回転ナデ調整を施した後内部を丹念にヘラミガキしたもの(3)と内面に黒色処理を施したもの(4)がある。

(3) 2号土壌 (第13図・P L15)

本土壌からは土師器甕(8・9・10)が出土している。

9は口縁部の大半と胴上部が遺存する。頸部はコの字形にくぼんで口縁部は短く外反する。

この口縁形態は「コの字状口縁」と呼ばれ、北武蔵型の甕の特徴とされ、東信地方の平安時代の遺跡から類例が出土している。内外面の口縁部は回転ナデ調整が施され、胴部はヘラケズリが施される。他に類例が2点出土している。

(4) 遺構外出土遺物 (第13・14図, P L13~18)

本遺跡では遺構に伴わない遺物が圧倒的に多く、出土遺物の大半を占める。ここでは、出土遺物を種類別において述べる。

○土師器 (第13・14図, P L13~15・18)

杯, 高台付杯, 碗, 皿, 高台付皿, 甕, 小型甕, 片口鉢が出土している。

杯は全てロクロ成形され、内面に黒色処理を施すもの (12~21・23・24・25) と施さないもの (11・22) の2種がある。

内面黒色処理の施された杯は12のように小型なもの、中型なもの、大型のもの (24・25) がある。21は、内面黒色処理を施した上に放射状の暗文を有する。

11は完形で、小型であり、成形は粗雑である。底部は回転イトキリの後ヘラケズリされている。

碗 (26・28) は大型で高台は短かい。焼成は全体に粗雑である。

31は皿で器厚は厚く、体部はゆるく外傾して口縁部は水平に開く。

高台付皿は小型のもの (32)、大型のもの (30) がある。32は完存している。内外面とも黒色処理されており、内面に放射状の暗文を有する。また、朱色の付着物がついている。

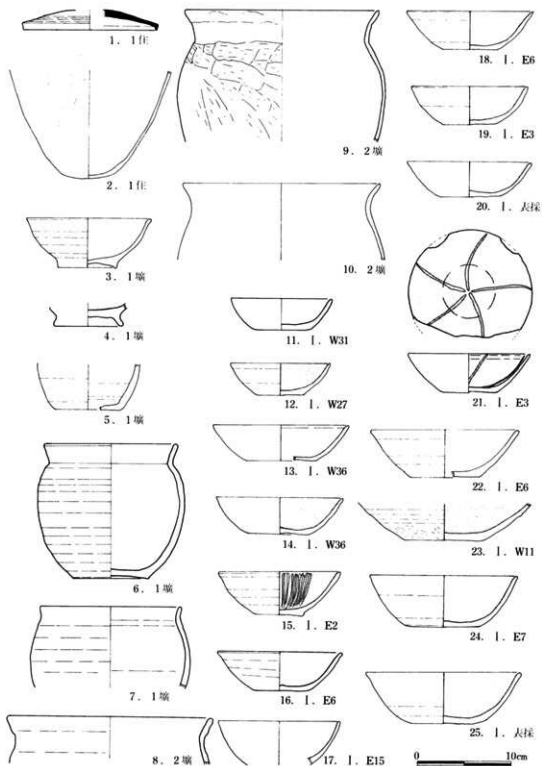
30は高台が欠損している。大型でゆるく外傾し、器厚は厚い。

甕は中型のもの (33・34・40)、極小のもの (39)、大型のもの (35・36・37・38) がある。

33は比較的小型でロクロ成形されている。底部は平底で若干肩が張り、口縁部は短く外傾する。類例が1号土壇から出土している。34は小型であり張らない胴部をもち、口縁部は短かく外反する。口縁部は回転ナデ調整が施され、胴部はカキ目も施されている。この土器は長野県内でも平安時代の遺跡からしばしば出土している。35は口縁部と胴上部が残っている。口縁部は短く外反し、胴部の張りは少ない。口縁部は回転ナデ調整され、胴部はタテのハケメ調整が施されている。36は口縁部と頸部のみ残っている。器厚は厚く、口縁部は大きく外傾する。外面は指ナデされ、内面はヨコナデされている。胎土は砂粒を多く含む。37は口縁部は短く外傾する。内外面とも回転ナデ調整されている。

39は極小型の甕で口縁部から胴上部まで遺存している。内外面とも回転ナデ調整が施される。頸部はコの字形にくぼみ、口縁部は短く外傾する。40は胴部は張らず、口縁部は短く外傾する。内外面とも回転ナデ調整され、内面は黒色処理されている。

41は片口鉢で口縁部~胴上部の一部が残っている。胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部の一部に3cm程の片口が付けられている。内外面とも回転ナデ調整され、内面は黒色処理されている。



第13図 古免遺跡遺物実測図 (1)

51は坯の口縁部の一部である。内外面とも回転ナデ調整が施され、内面は黒色処理の後横位のヘラミガキが行われる。また、体部の外面に「支」あるいは「友」と読める文字のようなものが線刻されている。

52は甕の胴下部と底部の一部とおもわれる。胴部は底部から急激に立ち上がる。外面はハケ調整を施し、櫛状工具で整形している。この土器は外面に楕円形の図のように見えるものが線刻されている。

○須恵器（第14・15図，P L 16・17）

須恵器の出土量は土師器に比較するとわずかである。器種は坯、高台付坯、蓋、甕などである。

坯は器高が低く焼成の良いもの（42）と器高が高く焼成がやや粗雑なもの（43）がある。いずれも底部は平底で回転ナデ調整を施す。底部の切り離しの技法は回転イトキリによっており、平安時代の所産とおもわれる。

高台付坯は底部のみ出土している。44は底部と体部の境界よりやや外側に外傾して端部がとがる高台を附しており、外面で接地する。外面は回転イトキリの後回転ナデ調整を施し、内面も回転ナデ調整を行っている。65は底部と体部の境界付近に端部が平らな高台を附している。外面は回転イトキリの後回転ナデ調整を施し、内面は回転ナデ調整されている。

蓋（45）は口縁部付近の4分の1が遺存するのみで、つまみの形状は不明である。天井部は途中でわずかに段をつかって下がり、鋭く屈曲する口縁端部へ至る。内外面とも回転ナデ調整が施される。

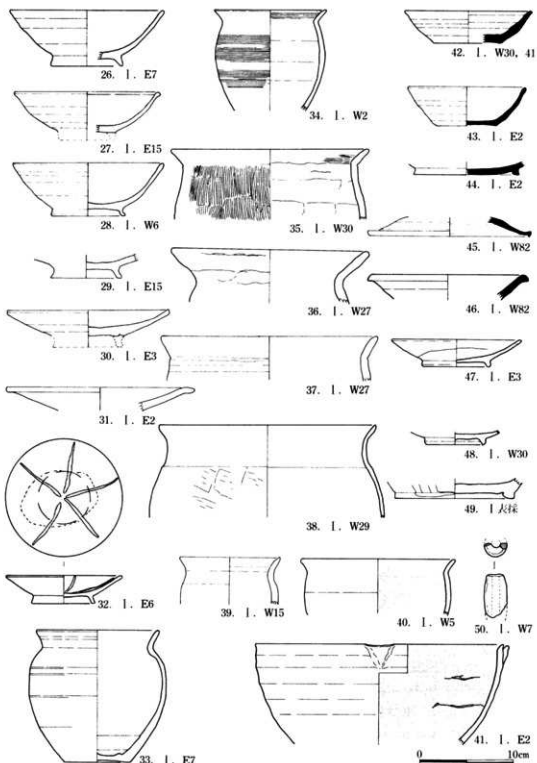
甕は胴部破片が多く出土しており、形状を明らかにできるものは少ない。59は大型の甕の頸部～胴上部で、口縁部の形状は不明である。胴部は緩やかに立ち上がり、頸部でくの字に屈曲し、口縁部へ至っている。頸部は波状文を施し、胴部はタタキ目を施している。内面は回転ヨコナデ調整を施す。波状文の形状等からみて平安時代前期の所産とおもわれる。

46は比較的小型の甕の口縁部である。口縁部はゆるやかに外傾して開く。口縁端部に面を有する。内外面とも回転ナデ調整を施す。

○灰釉陶器（第14図，P L 16）

灰釉陶器は4点出土しているが図示できたものは3点のみである。器種は高台付皿、長頸壺（甕）がある。

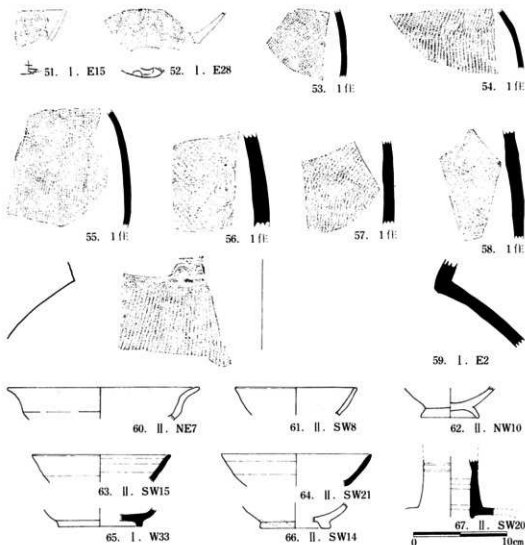
高台付皿は2点出土している。47は口縁部の5分の1と底部が遺存している。体部は内湾きみにゆるやかに外傾し口縁部に至る。底部と体部の境界に先端がさほどとがらない高台を附し、内端面で接地する。底部は回転イトキリの後、回転ナデ調整を施し、体部も内外面とも回転ナデ調整を行う。釉は漬け掛けされ、底部には施釉していない。内面中央に高台の跡がついており、重ね焼したためとおもわれる。また、内面中央部は若干磨耗しており、覗への転用も考えられる。焼成は良いが、高台はひび割れが5カ所見られる。釉のうすさや施釉法から見て折戸



第14図 古免遺跡遺物実測図(2)

53号窯期並行期の所産とおもわれる。48は底部の2分の1が遺存している。体部はゆるやかに外傾する。底部は回転イトキリの後、入念に回転ナデ調整を行い、先端がとがる高台を附している。またその他の部分も回転ナデ調整を施す。胎土は乳白色で極めて緻密であり、焼成は良好である。釉は薄く漬け掛けされ、底部は施釉していない。胎土の緻密さと焼成からみて瀬戸方面で作られたものとおもわれる。

長頸壺 (49) は底部の2分の1が遺存している。底部は厚く、胴部は急激に立ち上がる。胴部と底部の境界に幅が広く外端面で接地する高台を附す。内外面とも回転ナデ調整を施す。釉は全面に掛けられているが、施釉法は不明である。時期的には折戸53号窯期並行に位置すると



第15図 古免遺跡遺物実測図 (3)

おもわれる。

○その他の出土遺物（第14図，P L 17）

50は土錐である。全体の約2分の1が遺存している。中央部に口径約9mmの孔を穿孔している。外面はナデ調整を施す。

写真図版P L 18-51は陶器である。球形の体部に円柱状の突起物を附着している。胎土は緻密で、焼成も良好である。所々に顔料とおもわれるものが付着している。使用目的は不明である。

鉄製品は1点出土している。写真図版P L 18-52は刀子の一部とおもわれる。錆びており地鉄の詳細は不明である。

3 第Ⅱ区出土遺物（第15図，P L 17）

第Ⅱ区は、遺構が検出されず、黒褐色の遺物包含層の中から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが調査区全体から散発的に出土している。

60は弥生土器の高杯とおもわれる。杯部の2分の1が残っている。杯部中央に稜を持ち、口縁部は外反する。全面に赤色塗彩が施される。類例が上田市和手遺跡から出土しており、時期的には弥生時代後期に属し、後期箱清水土器とおもわれる。

62は土師器高台付杯である。底部と体部の一部が遺存している。底部と体部の境界に外傾して外へ張り出す高台を附す。内外面とも回転ナデ調整を施し、内面は黒色処理されている。平安時代前期の所産とおもわれる。61は土師器杯の口縁部で、内外面とも回転ナデ調整され、内面は黒色処理の後ヘラミガキされている。

63と64は須恵器杯で口縁部のみ遺存している。内外面とも回転ナデ調整を施す。

67は須恵器長頸壺で、頸部の2分の1が遺存する。頸部は直角に屈曲し、やや内湾ぎみに直立する。頸部の中位に2本の沈線を有する。内外面とも回転ナデ調整を施す。頸部～胴上部に自然釉がかかる。时期的には平安時代前期の所産とおもわれる。

66は鉄軸陶器で器種は酒徳利とおもわれる。底部の4分の1が遺存している。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部と胴部の境界に幅広く平らな高台を附す。外面は暗緑褐色の鉄釉を掛け、内面は茶褐色の鉄釉をかける。高台には施釉していない。

写真図版P L 17-48は須恵器である。平らな体部に脚のようなものを貼付し、小さな突起を設けている。用途は不明である。

4 縄文土器・石器（第16図）

今回の調査で出土した縄文時代の遺物としては、縄文土器破片16点と石器3点があり、そのほとんどを図示した。出土グリッドを列挙すると、縄文土器はI-39（第16図4，以下番号のみ）、I-E-56（5・8）、I-W-30（6）、I-92（7）、I-E-2（9）、I-W-25（10）、

第4表 古免遺跡遺物観察表 器種類の(弥)は弥生式土器、(師)は土師器、(須)は須恵器、(灰)は灰釉陶器、(鉄)は鉄胎陶器。法量欄の「○」付数値は推定復原値。

種別番号 図版番号	器 種 (形式)	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	外面調整の特徴	内面調整の特徴	備 考
13-1 16-30	(須) 蓋	口 径○14.2	・天井部は低い	・回転ナデ	・回転ナデ	・外面暗灰色 ・内面明灰色 ・細砂粒含む ・焼成普通 ・口縁部15%遺存
13-2 13-1	(師) 甕	○底 径○ 5.1	・胴部は丸底に近い不安定な底部から急に立ちあがる。	・胴部タテヘラズリ ・底部ヘラズリ	・胴部ヘラナデ	・橙褐色 ・砂粒含む ・器厚は薄い ・焼成良 ・底部～胴部80%遺存
13-3 13-2	(師) 高台付 杯	口 径○13.6 底 径○ 6.3 器 高 5.2	・口縁部は内湾きみに外傾 ・付け高台	・体部回転ナデ ・底部貼付け後回転ナデ	・回転ナデの撥入 念なヘラミガキ	・橙褐色 ・焼成良 ・50%遺存
13-4 13-4	(師) 高台付 杯	底 径 7	・付け高台は外側に張り出す	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ後ヘラミガキ	・外面明橙褐色 ・内面黒色地埋 ・砂粒含む ・焼成良 ・底部85%遺存
13-5 13-3	(師) 小形 甕	底 径○ 7	・底部は内湾きみに立ち上がる	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ	・外面灰褐色 ・内面灰橙褐色 ・砂粒含む ・焼成良 ・底部10%遺存
13-6 15-18	(師) 甕	口 径○14.0 胴最大径 15.6 底 径 8.0 器 高 14.2	・口縁部は直線的に短く外傾 ・胴部は中位やや上部に最大形をもつ ・頸部内面に横をもつ	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ	・橙褐色 ・砂粒含む ・焼成良 ・口縁部20%、胴部50%遺存 ・底部元存
13-7 15-19	(師) 甕	口 径○15.0 胴最大径○17.0	・口縁部はわずかに外傾して直立部分的ゆがみあり ・胴部は上部に最大形をもつ	・回転ナデ	・回転ナデ	・外面橙褐色、炭化物付着 ・内面淡灰褐色 ・砂粒含む ・焼成やや良、焼きムラあり ・胴上部1/4遺存
13-8	(師) 甕	口 径○19.2	・口縁部は外反してやや直立きみに開く ・頸部はコの字状を呈する	・口縁部～頸部ヨコナデ	・ヨコナデ	・明橙褐色 ・細砂粒含む ・焼成普通 ・口縁部1/4遺存
13-9 15-20	(師) 甕	口 径○20.5 胴最大径 22	・口縁部はやや外反きみに開く ・頸部はコの字状	・口縁部ヨコナデ ・頸部ヨコナデ ・胴上部ヨコヘラ	・ヨコナデ	・外面暗橙褐色、一部黒斑 ・内面明橙褐色

排列番号 図版番号	器 種 (形式)	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	外面調整の特徴	内面調整の特徴	備 考
			を呈する ・胴部は中位に最大径をもつ球形と思われる	ケズリ ・胴中部ナメヘラケズリ		・砂粒含む ・焼成普通 ・器厚薄い ・口縁部95%遺存 ・胴上部1/2遺存
13-10	(師) 壺	口 径○21	・口縁部は外反して開く ・頸部はややコの字状を呈する	・口縁部ヨコナデ ・頸部～胴上部ヘラケズリ	・ヨコナデ	・明橙褐色 ・細砂粒含む ・焼成普通 ・口縁部1/10遺存
13-11 13-5	(師) 杯	口 径 11.2 (長 径) 11.2 (短 径) 10.4 底 径 5.7 器 高 3.3	・体部は内湾して立ち上がる ・全体に歪んでおり、楕円形を呈する	・回転ナデ ・底部回転イトキリ後ヘラケズリ	・回転ナデ ・中央部ユビナデ	・明橙褐色 ・砂粒多く含む ・焼成粗雑 ・完存
13-12 13-6	(師) 杯	口 径○10.6 底 径 4.7	・体部は内湾ぎみに立ち上がる	・体部回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ	・外面明橙褐色 ・内面黒色処理 ・砂粒含む ・焼成普通 ・口縁部1/4遺存 ・底部完存
13-13	(師) 杯	口 径○14.5 底 径○ 7.4 器 高 3.8	・体部は内湾ぎみに立ち上がる	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成普通 ・1/4遺存
13-14 13-7	(師) 杯	口 径 13.6 底 径 6.4 器 高 4.0	・体部は内湾ぎみに立ち上がる	・体部回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ後ヨコミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成やや良 ・焼き歪みあり ・90%遺存
13-15 13-8	(師) 杯	口 径 13 底 径 5.3 器 高 4.6	・体部は内湾ぎみに立ち上がる	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ後タテヘラミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・歪みあり ・焼成良 ・98%遺存
13-16 13-9	(師) 杯	口 径 13.3 底 径 5.7 器 高 4.1	・体部は内湾ぎみに外傾	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ後ヘラミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成やや良 ・口縁部の一部にタール状の付着物がつく ・完存
13-17	(師) 杯	口 径○13	・体部はやや内湾ぎみに外傾	・回転ナデ	・回転ナデ後タテヘラミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成良 ・口縁部1/5遺存

標記番号 図版番号	器 種 (形式)	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	外面調整の特徴	内面調整の特徴	備 考
13-18	(飾) 坏	口 径 13.4 底 径 5.8 器 高 4.1	・体部は内湾きみに外傾	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ後ヘラミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成やや良 ・90%道存
13-19 14-10	(飾) 坏	口 径 12.5 底 径 5.6 器 高 4	・体部は内湾して外傾	・回転ナデ	・回転ナデ後、放射状ヘラミガキ ・底部回転イトキリ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成やや良 ・2/3道存
13-20	(飾) 坏	口 径 13.3 底 径 6.3 器 高 3.7	・体部は内湾きみに立ち上がる	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ後ミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成やや良 ・1/2道存
13-21 14-11	(飾) 坏	口 径 16 底 径 5.8 器 高 4.1	・体部はやや内湾きみに外傾	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・内面に放射状の筋文を施す ・焼成良 ・細砂粒含む ・2/3道存
13-22	(飾) 坏	口 径 15.8 底 径 7.2 器 高 5	・体部は内湾きみに外傾	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ後放射状ヘラミガキ	・明橙褐色 ・砂粒含む ・焼成やや良 ・1/3道存
13-23 14-12	(飾) 坏	底 径 8.5	・体部はなだらかに立ち上がる	・体部上部回転ナデ ・体部下部へ底部ヘラミガキ	・回転ナデ後ヘラミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成普通 ・底部90%道存 ・体部1/2道存
13-24	(飾) 坏	口 径 15.8 底 径 8.2 器 高 5.5	・体部は内湾きみに外傾	・回転ナデ ・底部回転イトキリ後回転ナデ	・回転ナデ後ヘラミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成やや良 ・1/4道存
13-25 14-13	(飾) 坏	口 径 16.6 底 径 7.2 器 高 5.4	・体部は内湾して立ち上がる	・回転ナデ ・底部回転イトキリ	・回転ナデ後ミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成普通 ・1/2道存
14-26	(飾) 碗	口 径 16.4 底 径 7.7 器 高 5.9	・体部はやや内湾きみに外傾 ・付け高台	・回転ナデ ・底部回転イトキリ ・高台貼付け後回転ナデ	・回転ナデ後ミガキ ヘラミガキ	・外面…明橙褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成やや良 ・口縁部1/2、底部1/3道存
14-27	(飾)	口 径 15.6	・体部は内湾きみ	・回転ナデ	・回転ナデ	・外面…明橙褐色

別表番号 図版番号	器 種 (形式)	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	外面調整の特徴	内面調整の特徴	備 考
	高 台 付 罎		・ 外傾 ・ 口縁部短く外反 ・ 付け高台	・ 付け高台貼付後 回転ナデ	・ 口縁部のムスコ ヘラミガキ	・ 内面…黒色処理 ・ 砂粒含む ・ 焼成良 ・ 1/4遺存 ・ 付け高台欠損
14-28 14-14	(飾) 罎	口 径○16 底 径○ 7.6 器 高 5.7	・ 体部はやや内湾 ぎみに立ち上がる ・ 付け高台	・ 回転ナデ	・ 回転ナデ後ヘラ ミガキ	・ 外面…明褐色 ・ 内面…黒色処理 ・ 砂粒含む ・ 焼成やや良 ・ 1/2遺存
14-29	(飾) 罎	底 径 7.6	・ 付け高台	・ 回転ナデ ・ 付け高台貼付後 回転ナデ	・ 回転ナデ後ヘラ ミガキ	・ 外面…明褐色 ・ 内面…黒色処理 ・ 細砂粒含む ・ 焼成良 ・ 付け高台のみ欠存
14-30 14-15	(飾) 高 台 付 皿	口 径○17.3	・ 体部はゆるやかに 外傾 ・ 付け高台は欠損	・ 回転ナデ	・ 回転ナデ後放射 状ヘラミガキ	・ 外面…明褐色 ・ 内面…黒色処理 ・ 細砂粒含む ・ 焼成良 ・ 1/2遺存
14-31	(飾) 皿	口 径○20	・ 体部は内湾ぎみに 立ち上がり、 口縁部は水平に 開く	・ 回転ナデ	・ 回転ナデ	・ 明褐色 ・ 砂粒含む ・ 焼成良 ・ 器厚ハ ・ 口縁部1/4遺存
14-32 14-16	(飾) 高 台 付 皿	口 径 12.4 底 径 6.8 器 高 3	・ 体部はゆるやかに 外傾 ・ 付け高台	・ 回転ナデ後ミガキ ・ 底部回転イトキ リ後ナデ ・ 高台貼付け後回 転ナデ	・ 回転ナデ ・ 口縁部のムスコキ 放射状の指文を 施す(5本)	・ 黒色処理 ・ 内面に赤色痕を有 する ・ 焼成良 ・ 欠存
14-33 15-21	(飾) 罎	口 径○13.1 胴最大径 14.6 底 径 7 器 高 14	・ 口縁部は直線的 に短く外傾 ・ 胴部は中位やや 上に最大径をも つ	・ 回転ナデ ・ 底部回転イトキ リ後ナデ	・ 回転ナデ	・ 明褐色 ・ 砂粒含む ・ 焼成良 ・ 口縁～胴部1/3遺存 ・ 底部欠存
14-34 15-22	(飾) 罎	口 径○12 胴部最大径 11.7	・ 口縁部は短く外 反する ・ 胴部は、中位に 最大径をもつ球 形と思われる	・ 口縁部ヨコナデ ・ 胴部カキ目をもつ	・ 口縁部カキ目 ・ 胴部ヨコナデ	・ 暗灰褐色 ・ 焼成良 ・ 器厚薄い ・ 口縁～胴部1/3 遺存
14-35 15-23	(飾) 罎	口 径○21	・ 口縁部は短く外 反して開く	・ 口縁部回転ナデ ・ 胴部タテハミ	・ 口縁部回転ナデ ・ 胴部ユビナデ	・ 褐色 ・ 砂粒含む ・ 焼成良 ・ 口縁部1/10遺存
14-36 15-24	(飾) 罎	口 径○21	・ 口縁部はやや外 反ぎみに開く	・ 指ナデ	・ 指ナデ	・ 明褐色 ・ 砂粒多く含む ・ 焼成不良 ・ 器厚薄い ・ 口縁部10%遺存

種別番号 図版番号	器 種 (形式)	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	外面調整の特徴	内面調整の特徴	備 考
14-37 15-25	(飾) 壺	口 径○23	・口縁部は短く外 傾して開く	・回転ナデ	・回転ナデ	・明検褐色 ・砂粒含む ・焼成良 ・器厚薄い ・口縁～頸部10%遺存
14-38	(飾) 壺	口 径○23	・口縁部は外反き みに開く ・頸部は明瞭にコ の字状を呈する ・胴部は中位に最 大径をもつ球形 と思われる	・口縁～頸部ヨコ ナデ ・胴上部ヨコヘラ ミガキ	・ヨコナデ	・明検褐色 ・砂粒含む ・焼成普通 ・器厚薄い ・口縁～胴上部1/10 遺存
14-39 15-26	(飾) 小型 壺	口 径○10.6	・口縁部は短く外 反して開く ・頸部はややコの 字状を呈する	・口縁部～頸部回 転ナデ ・胴部ヨコナデ	・回転ナデ	・明検褐色 ・砂粒含む ・焼成普通 ・器厚薄い ・口縁部～胴上部 1/4遺存
14-40 15-27	(飾) 小型 壺	口 径○16.4	・口縁部は短く外 反する	・口縁～胴上部ヨ コナデ	・内面ヨコナデ後 ヘラミガキ	・外面…明検褐色 ・内面…黒色処理 ・焼成良 ・口縁～胴上部10%遺存
14-41 14-17	(飾) 片 口 鉢	口 径○26.4	・体部は内湾して 立ち上がり、口 縁部はわずかに 外傾 ・口縁部に注口を もつ	・回転ナデ	・回転ナデ	・外面…明検褐色 ・内面…黒色処理 ・砂粒含む ・焼成良 ・口縁部20%遺存
14-42 15-28	(類) 杯	口 径○13.5 底 径○ 7.2 器 高 3.4	・体部は内湾きみ に立ち上がる	・回転ナデ ・底部回転イトキ リ	・回転ナデ	・暗灰色 ・砂粒含む ・焼成良 ・口縁部1/2、底部 1/3遺存
14-43 15-29	(類) 杯	口 径○12.6	・体部は内湾きみ に立ち上がる	・回転ナデ	・回転ナデ	・明灰色 ・砂粒含む ・焼成良 ・1/2遺存
14-44 16-32	(類) 高 台 付 杯	底 径○ 9	・付け高台	・回転ナデ	・回転ナデ	・明灰色 ・砂粒含む ・焼成良 ・底部10%遺存
14-45 16-31	(類) 蓋	口 径○17	・天井部はやや低い	・回転ナデ	・回転ナデ	・明灰色 ・細砂粒含む ・焼成良 ・口縁部10%遺存
14-46	(類) 壺	口 径○17	・口縁部は外反する ・口縁端部に面を もつ	・回転ナデ	・回転ナデ	・明灰色 ・砂粒含む ・焼成やや良

採回番号 図版番号	器 種 (形式)	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	外面調整の特徴	内面調整の特徴	備 考
			・器厚は薄い			・口縁部5%遺存
14-47 16-34	(灰) 丸 皿	口 径○13.8 底 径 6.8 器 高 2.9	・体部はやや内湾 きみにゆるやかに外傾 ・付高台	・回転ナデ	・回転ナデ	・灰白色 ・焼成良 ・高台はヒビワレ ・底部は完存、口縁 は1/10遺存
14-48 16-35	(灰) 皿	底 径○ 5.9	・高台は、先端が 尖がる	・回転ナデ ・底部回転イトキ リ後回転ナデ ・高台貼付後回転 ナデ	・回転ナデ	・乳白色 ・焼成良 ・底部1/2遺存
14-49 16-36	(灰) 長 頸 壺 (甕)	底 径○14	・胴部はやや急に 外傾 ・胴部と底部の境 界に幅広い高台 を附す	・回転ヨコナデ	・回転ヨコナデ	・灰白色 ・内外面に淡緑色の 釉をかける ・焼成良 ・底部1/3遺存
15-59 17-43	(須) 甕	頸部径○40	・胴部はなだらかに 立ち上がり頸 部でくの字に屈 曲し、口縁部は やや外傾する ・器厚は薄い	・口縁部に波状文 を施す ・胴部はタタキ目 を施す	・ヨコナデ	・明灰色 ・焼成良 ・口縁部の一部と胴 上部5%遺存
15-60 17-44	(赤) 高 杯	口 径○21.1	・口縁部は外反し て開く ・体部は屈曲して 外傾する	・ヨコナデ	・ヨコナデ	・赤色色彩 ・砂粒含む ・焼成良 ・口縁部1/2遺存
15-61	(陶) 杯	口 径○13	・体部は内湾きみ に外傾	・ヨコナデ	・ヨコナデ	・外面→明緑褐色 ・内面→黒色処理 ・砂粒含む ・焼成良 ・口縁部1/10遺存
15-62	(陶) 高 台 付 杯	底 径○ 6.2	・付け高台 ・体部は内湾きみ に外傾	・ヨコナデ ・付け高台貼付後 回転ナデ	・回転ナデ後ヘラ ミガキ	・外面→明緑褐色 ・内面→黒色処理 ・砂粒含む ・焼成良 ・付け高台完存
15-63 17-46	(陶) 杯	口 径○15	・体部はやや内湾 きみに外傾	・回転ナデ	・回転ナデ	・明灰色 ・細砂粒含む ・焼成良 ・口縁部1/10遺存
15-64 17-45	(陶) 杯	口 径○16	・体部はやや内湾 きみに外傾	・回転ナデ	・回転ナデ	・明灰色 ・細砂粒含む ・焼成良 ・口縁部1/10遺存
15-65 16-33	(須) 高 台 付 杯	底 径○ 9	・体部は内湾きみ に外傾 ・付け高台	・回転ナデ ・底部回転イトキ リ後回転ナデ	・回転ナデ	・暗灰色 ・細砂粒含む ・焼成普通 ・底部1/3遺存

検出番号 回収番号	器 種 (形式)	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	外面調整の特徴	内面調整の特徴	備 考
15-66 17-49	(鉄) 徳 利	底 径 7.5	・体部は内湾きみに外傾 ・付け高台	・回転ナデ後鉄軸	・回転ナデ後鉄軸	・外面…暗緑色 ・内面…茶褐色 ・細砂粒含む ・焼成良 ・底部1/5遺存
15-67 17-47	(銅) 長 頸 壺		・頸部はわずかに外反して直立 ・頸部上位に2本の沈線を有する	・回転ナデ	・回転ナデ	・明灰色 ・頸部に降灰 ・細砂粒含む ・焼成良 ・頸部2/3遺存

I-E-35 (11), I-E-50 (12), II-NE-14 (2), II-SW-14, II-SW-9, 表採 (1・3) である。石器はI-E-3 (13), I-W-29 (14), II-SW-11 (15) である。遺構に伴うものではなく、調査区域のほぼ全面から散発的に出土した。縄文土器は中期中葉、中期後葉、後期前葉の大きく3時期にかかり、以下に時期を追って説明する。

1群：中期中葉（第16図1）

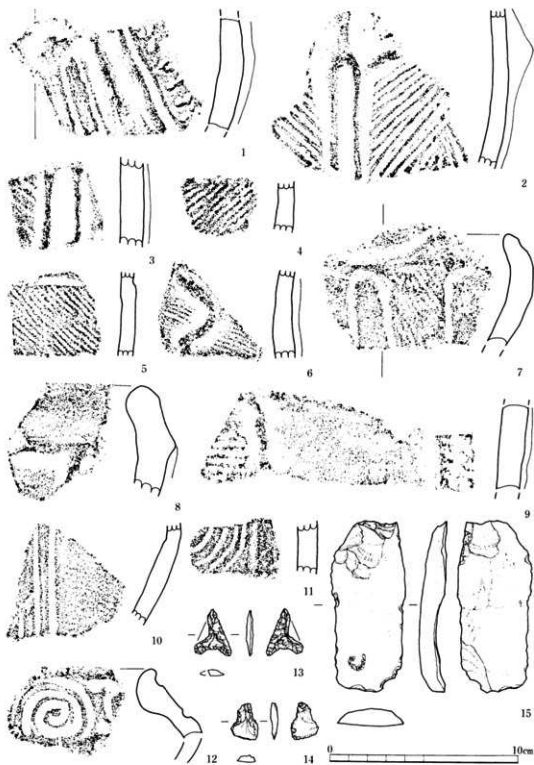
1は厚手でやや湾曲した胴部破片と思われる。斜走する降帯とこれに沿う2本1組の深い沈線が施されている。沈線の区画内には列点刺突が施され、一見「焼町土器」と似るが、異なる特徴をもつ。中期中葉の新しい段階の所産と考えてよからう。胎土に雲母が目立ち、赤褐色を呈する焼成の良い土器である。

2群：中期後葉（第16図2・3・5～9）

2・3は唐草文系土器である。2は丸味のある胴部破片で、2本1組の降帯が縦走し、これが枝分れする部分が突出している。地文は竹管内面で綾杉状の沈線が深く刻まれ、降帯の脇はなぞられている。3も2本1組の降帯が縦走するが、断面形は三角形に近く低平である。地文は棒状工具で斜沈線が浅く施されている。2点とも唐草文系土器のⅡまたはⅢ段階に属すと思われるが、3が後出的である。6は蛇行降帯が縦走し、地文に縄文LRが施されている。唐草文系土器に伴うものと思われる。5・7～9は加曾利E式である。7は内湾する波状口縁の深鉢で、胴中位がくびれる器形であろう。推定最大径16cm前後で、小形の部類に属す。口縁部には波形に沿って沈線が無文帯が画され、U字形の波状沈線文が描かれている。地文は縄文LRである。8・9は同一個体と思われ、厚手の大形深鉢である。8は内湾する口縁部で、低平な断面三角形の降帯を貼付して無文帯を画している。ここから微隆起帯が垂下し、直線的な胴部破片の9に至る。9の微隆起帯区画内は縄文LRが施され、降帯上にもかかる。5は横位の沈線で画された無文部の下に細かい縄文LRが施されている。これらは加曾利EⅢ・Ⅳ式であろう。2・3より後出するものである。

3群：後期前葉（第16図10～12）

10は鉢の胴下部と思われる。3本以上を1組とする縦位沈線で区画され、地文に縄文LRを



第16図 縄文土器拓本図・石器実測図

施している。11は4本以上の集合沈線が弧状のモチーフを描くらしい。12は口縁が内屈する鉢である。太い沈線で渦文が描かれ、この間隙に大きな刺突が配されるらしい。屈曲部以下は無文であろう。いずれも堀之内Ⅰ式段階と思われ、11は後出的である。

4群：時期不明（第16図4）

縄文LRのみ。2～4群土器は胎土に砂粒をやや多く含み、焼成はあまりよくない。

石器（第16図13～15）

13は黒曜石の石鏃である。浅い凹基の三角鏃で、比較的大形の部類に属す。不純物の部分で欠損している。14は黒曜石の剝片である。両側縁から調整され、三角形を意識したものか打点側が狭くなっているため、石鏃未成品の可能性もある。15はホルンフェルスの縦長剝片である。円鏃の側縁を素材としており、打点付近から表面に二次剝離を施している。裏面の側縁の一部に連続した調整が加えられている。

塩川地区でこれまでに発掘調査された遺跡は、いずれも古墳時代以降を主体とし、とりわけ古墳時代後期から平安時代には住居址の検出が多い。それらのうち、井戸下、稲羽北、市の町の各遺跡では少量ながら縄文時代の遺物の出土が知られる。稲羽北は石器のみで時期を特定できないが、他の2遺跡と古免遺跡の関連はどうであろうか。市の町では楕円押型文、中期前葉・中期後葉・後期前葉土器、井戸下では前期末～中期初頭・中期中葉・中期後葉・後期前葉土器が見られた。市の町の押型文を除けば3遺跡とも、中期中葉前後から後期前葉の間に、断続的ながらまとまりが見られる。3遺跡とも加曾利EⅢ・Ⅳ式期の土器が多く、堀之内Ⅰ式頃に途絶える点も共通する。また後世の擾乱を考慮しても、遺物量や連続性から、断続的な小集落と推定される。今回の調査もこれを追認する形となった。本遺跡付近の拠点集落は、おそらく、塩川沢対岸にあり遺物が多出するという東畑遺跡であろう。

第3章 芝宮遺跡

I 遺構 (第7・17図, P L19~22)

本調査で検出された遺構は溝1本と土塁1基である。

1 溝 (第17図, P L21)

本址は調査区の東北端に位置する。土塁に沿って南北方向に掘られている。幅はA-A'間で245cm, B-B'間で220cm, 深さはA-A'で17cm, B-B'間で10cmを計る。断面形は壁が緩やかに立ち上がり, 底面が下弦弧を描く鍋底状を呈する。遺物は土塁の^表際の覆土中から内耳鍋が出土している。西方からの攻撃を防ぐ目的でつくられた砦の空堀とおもわれる。

2 土塁 (第7図, P L22)

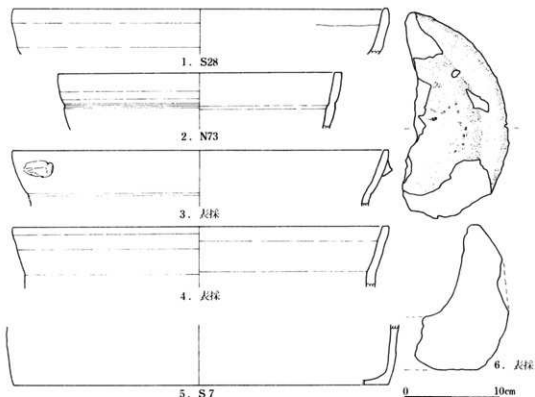
本址は調査区の東端に位置し, 南北方向に作られている。下部に直径35~40cmの円礫を配列し, その上に土を盛り, 空堀の面から60~90cmの比高差を設けている。この土盛遺構は空堀の面から急に立ち上がり, 砦のあったと思われる東側に同一レベルで5m程続き, なだらかに傾斜して, 稲荷神社の敷地へ続いている。砦の土塁跡とおもわれる。



第17図 芝宮遺跡溝実測図

II 遺物 (第18図, 第5表・P L23)

今回の調査で出土した遺物の総量は破片の状態で整理用平箱1箱にも満たず, ごくわずかである。出土遺物は全て内耳鍋の破片であり, 1号溝から出土している。いずれも小破片が多く, 図示できるものは少ない。



第18図 芝宮遺跡出土遺物実測図

第5表 芝宮遺跡遺物観察表 法見欄の「○」付数値は推定復原値

標記番号 図版番号	器種 (形式)	法量 (cm)	形態の特徴	外面調整の特徴	内面調整の特徴	備考
18-1 24-1	内 耳 鍋	口 径○40	・口縁部はやや外 傾	・回転ナデ	・回転ナデ	・外面…黒褐色 ・内面…明橙褐色 ・砂粒多く含む ・焼成良 ・口縁部1/10遺存
18-2 24-2	内 耳 鍋	口 径○30	・口縁部はやや外 傾 ・内、外面にくび れを有する	・回転ナデ	・回転ナデ	・外面…黒褐色 ・内面…明橙褐色 ・砂粒多く含む ・焼成良 ・口縁部1/10遺存
18-3 24-3	内 耳 鍋	口 径○40	・口縁部はやや内 湾ぎみに外傾 ・口縁部に粘土瘤 を貼付する	・回転ナデ	・回転ナデ	・橙褐色 ・砂粒多く含む ・焼成良 ・口縁部1/3遺存
18-4 24-4	内 耳 鍋	口 径○40	・口縁部はやや屈 曲して外傾	・回転ナデ	・回転ナデ	・明橙褐色 ・砂粒多く含む ・焼成良 ・口縁部1/10遺存
18-5 24-5	内 耳 鍋	底 径○40	・胴部は内湾ぎみに 直立 ・底部は薄い	・回転ナデ	・回転ナデ	・外面…黒褐色 ・内面…明橙褐色 ・砂粒多く含む ・焼成良 ・底部～胴下部1/5遺存

1 1号溝出土遺物（第18図）

1は内耳鍋の口縁部と胴上部の一部である。胴部はやや外傾ぎみに立ちあがり口縁部に至る。口縁部に面を有し、胴上部の内外面にくぼみが見られる。内外面とも回転ナデ調整を施す。

2は内耳鍋の口縁部と胴上部の一部である。胴上部はわずかに屈曲して口縁部へ至る。口縁部は面をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。

5は内耳鍋の胴下部と底部の一部である。胴部は平板な底部からやや内湾ぎみに立ち上がる。底部の器厚は薄い。

2 遺構外出土遺物（第18図，P L23）

本遺跡では遺構内から出土した遺物は少なく、他はすべて表面採集の遺物である。

4は内耳鍋の口縁部から胴上部の一部である。胴上部でわずかにくの字形に屈曲して口縁部に至る。口縁部に面を有する。内外面とも回転ナデ調整を施す。

3は内耳鍋の口縁部から胴上部の一部である。胴部はややくの字形に屈曲して口縁部に至る。口縁部に3.2cm×1.6cmの楕円形の粘土瘤を貼付する。内外面とも回転ナデ調整を施す。

6は石臼である。全体の約4分の1が遺存している。口径23cm，底径19cm，高さ15.3cmを測る。内面は荒れているが、わずかに使用痕がうかがえる。

第4章 まとめ

I 古免遺跡

発掘調査の結果、本遺跡からは縄文時代中期と平安時代の遺物、そして平安時代の遺構が検出され、本遺跡は主に平安時代に営まれていたことが明らかとなった。調査の詳細については各章で述べられているとおりであるのでここでは若干の考察を試み、まとめとしたい。

古免遺跡がある小県郡丸子町塩川地区の歴史はまえに述べたとおり市の町遺跡の発掘調査(1985)の際に1片の押型文土器が出土し、縄文時代早期までさかのぼることが明らかになっている。しかし、集落が存在したとは考えられず、本格的に定住するようになるのは、縄文時代の中期に入ってからとおもわれる。古免遺跡が存在する南方の地区には、塩川沢に沿って上流から大岩、東畑、松葉の3つの縄文時代中期の遺跡が点在している。特に東畑遺跡は、塩川沢をはさんで古免遺跡の対岸にある。これらの縄文時代の遺跡はいずれも未発掘であり、その全貌は明らかにされていないが、詳細分布調査の結果からみていずれも小規模な遺跡とおもわれる。

古免遺跡からも縄文時代中期の土器片が出土しているが、いずれも遺構に伴っておらず、集落があった可能性は薄いが、対岸の東畑遺跡と何らかの関連性が考えられる。

古免遺跡では人々が定住するようになるのは平安時代の前期になってからであろう。今回の調査では遺構はすべて1区から検出されており、時代は平安時代前期である。なかでも1号土壇は遺物がよく残っており、出土量も最も多かった。とくに土師器の甕はこの時期の代表的なもので、ロクロ成形によって作られ、底部には回転イトキリ痕が明瞭に残っている。

また、杯は高台付とそうでないものに分れるが、いずれもロクロ水挽き成形により一氣に作られている。ただし粗雑な作りの物も多く見られた。

1号住居址は北壁にカマドをもつ隅丸方形プランを呈するものと考えられるが、攪乱によって大半が破壊されており、柱穴も検出できなかった。詳細な時期決定の根拠に欠けるうらみがあるが、ほぼ1号土壇と同時期と見て差しつかえないとおもわれる。

次に、2号土壇は大きく攪乱を受けており、土壇と言えないような形態をしている。この遺構からは、平安時代に関東地方に見られるいわゆる“武蔵型甕”の類例とおもわれる土師器甕が出土している。この類例は塩川地区の井戸下遺跡からも出土している。

また、1号ビット群からは土師器の杯の破片が1点出土したのみで明瞭な時期決定の資料とはなり得ないが、他の遺構との関連から同一時期と判断した。さらに、ビットが他に6箇所検

出された。

この他にも遺物が集中して出土する地点が3箇所あったが、はっきりした遺構が検出されなかった。

また、遺物は、土師器の高台付皿や須恵器の長頸壺・杯・杯蓋、灰釉陶器の杯・長頸壺などが出土した。Ⅱ区からは須恵器や土師器の小破片が出土したが、遺構は検出されなかった。

いずれにしろ縄文時代以降平安時代前期になるまでこの地が人々に利用されなかったのは、塩川地区の中でもとくに水が乏しい地域で稲作を行うのに適していなかったためとおもわれる。また、この地籍の地形は、河岸段丘や沢、山地等によって区切られており、塩川沢の水だけでは水量が乏しく、遠方から長大な水路を引くことによってようやく開田されたとおもわれる。このように生産性が低く、周囲と隔絶された地形をもつ古免・埴田原地籍は水田よりもむしろ馬を放牧した牧として利用するのに適しており、この地区の開田が遅れたのも牧として重要視されていたからではないかと推測されている。

信濃の国は古くから馬の産地として着目されており、たしかな史料ではないが『和漢三才図会』には安閑天皇の御代（530年代）に馬を望月の牧と霧原の牧に放牧したことが記されている。また、『延喜式』には信濃十六牧が朝廷の牧（御牧）として置かれていたことが記載されている。

平安時代の末期になり、武士が歴史の舞台に登場するようになると馬の需要は急増し、信濃の国のほぼ全域に牧が置かれるようになる。『吾妻鏡』の文治二年（1186）の条には左馬寮領の牧として、信濃の御牧二十八の名が記されており、その中に望月の牧や新張（現東部町）の牧と並んで「塩河」の牧の名前が見られる。一志茂樹氏はその著書の中で塩河の牧の位置を塩川地区一带と推定しており、牧監が牧を管理する施設の存在も指摘している。ここで想像をたくましくすれば、古免遺跡も牧と何らかの関係があったのではないかと考えられるが、遺跡の全体を調査できなかったため、推測の域を出ない。さらに、治承4年（1180）に木曾義仲が平家追討のために挙兵した白鳥河原は千曲川をはさんで対岸にあり、この地が義仲軍の騎馬調達のために、大きな役割を果たした可能性が考えられる。

いずれにしても、今回の調査では遺跡の盛土保存を最優先したため、農道予定地の限られた地域を調査したにとどまり、遺跡の全容を明らかにすることができなかった。このため、牧との関連は推測の域を出ないが、平安時代の人々が定住していたことは明らかであり、塩川地区の歴史解明に貴重な資料が得られたものとおもわれる。

Ⅱ 芝宮遺跡

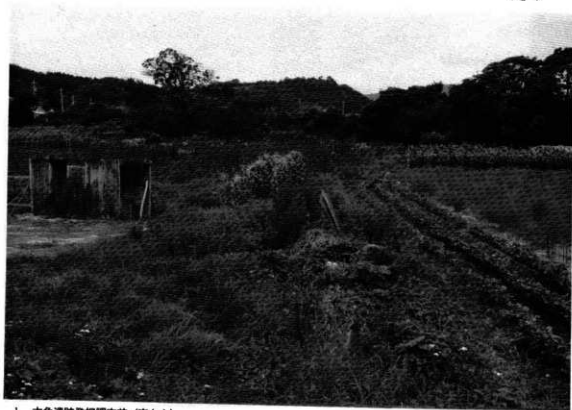
発掘調査の結果、本遺跡からは中世の遺物と埴の空堀と土塁とおもわれる遺構が検出された。空堀とおもわれる溝は土塁に沿って掘り込まれており、恐らく溝の手前には柵を設けて敵の侵

人を防いだものと考えられる。また、この溝から内耳鍋が出土している。

小泉郡史には芝宮砦について「(前略) 郭は東西二十間、南北三十五間許。東南、及び東北は塩川沢之を繞り、北は程なくして千曲川に沿ふ。川に面する方はすべて断崖にして其高凡二十尺。西方塩川平に接する方には土堤を繞す。里伝に城址なりといへども砦址なるべし。砦とすれば恐くは陣馬城の東方防備の一工事ならんか。」とあり、芝宮遺跡の西方約1kmの陣馬山山頂に所在する陣馬城の東の備えとして設けられたものとおもわれる。陣馬城は天正13年(1585)に徳川家康が真田昌幸を攻め、塩川平で戦った際に徳川氏が本陣を置いた所といわれている(小泉郡史)。

今回の調査では圃場整備事業に該当する範囲のみを発掘したにとどまり、砦の中心部である稲荷神社境内は調査対象外で発掘することができなかった。そのため、砦の内部については解明できなかったが、砦の空堀、土塁の存在が明らかとなり、砦の一部を確認することができた。

図 版



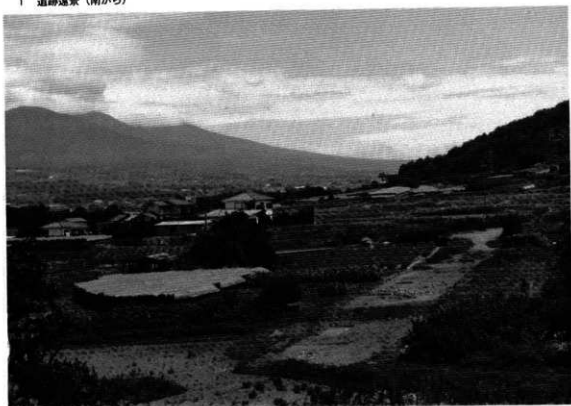
1 古免遺跡発掘調査前（東から）



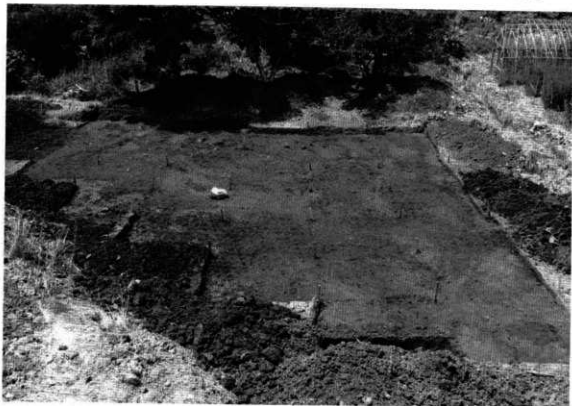
2 表土はぎ



1 道跡遠景（南から）



2 道跡遠景（西から）



1 II区全景 (東から)



2 II区遠景 (西から)



1 発掘風景



2 発掘風景



3 発掘風景



4 発掘風景



5 発掘風景



6 発掘風景



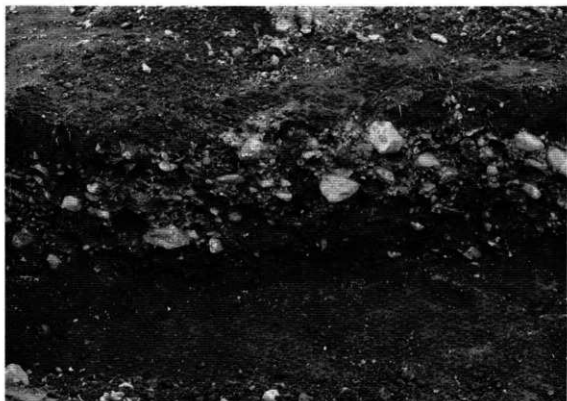
7 発掘風景



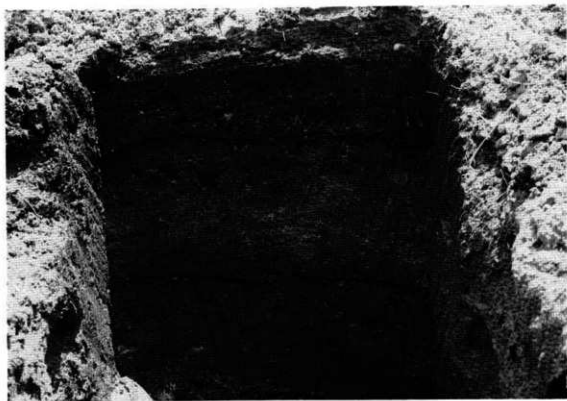
8 発掘風景



1 I 区土层断面 (S₁)



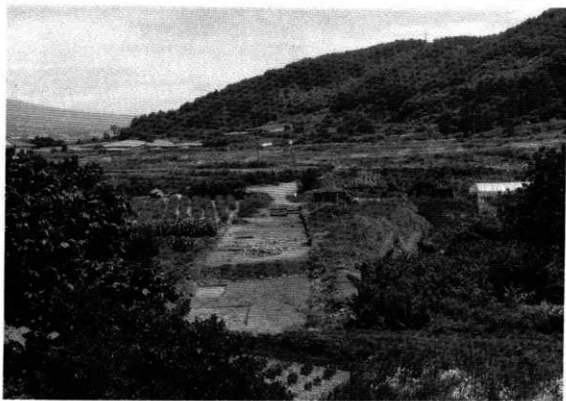
2 I 区土层断面 (S₂)



1 II 区土層断面 (S.)



2 II 区土層断面 (S.)



1 I区全景 (西から)



2 I区全景 (東から)



1 1号住居址 (南から)



2 1号住居址遺物出土状態



1 1号土坑



2 1号土坑遺物出土狀態



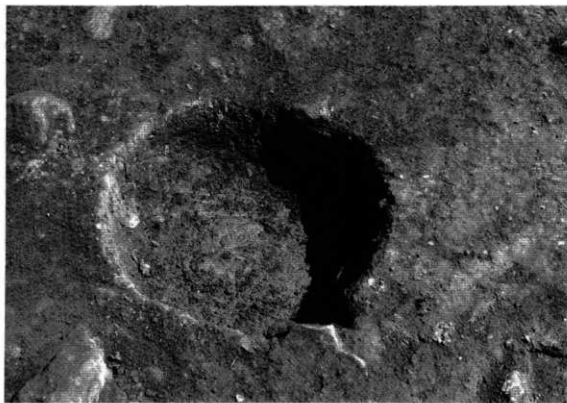
1 2号土坑（東から）



2 1号ピット群



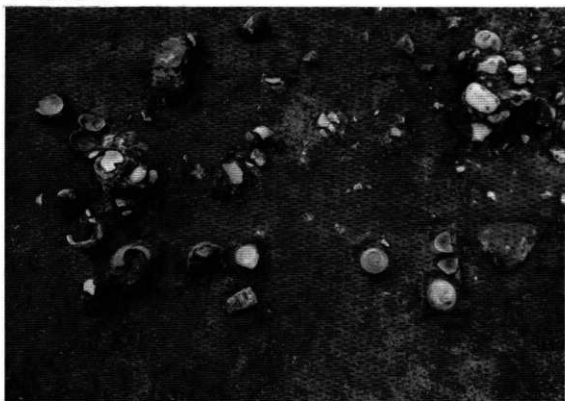
1 5号ビット



2 6号ビット



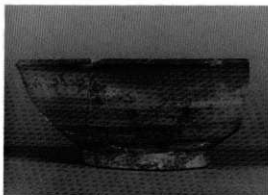
1 1区遺物出土状態



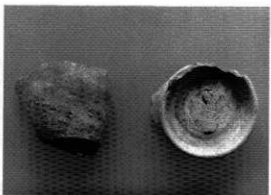
2 1区遺物出土状態



1



2



3

4



5



6



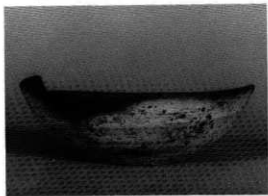
7



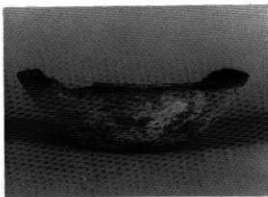
8



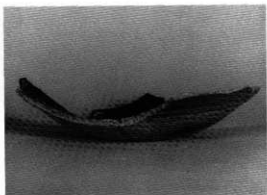
9



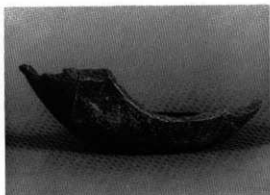
10



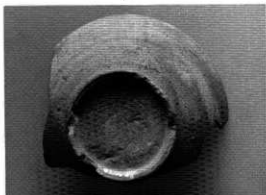
11



12



13



14



15



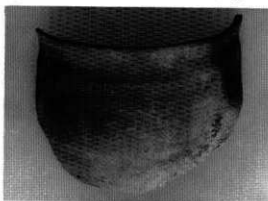
古免遺跡出土遺物 (第13・14図) 16



17



18



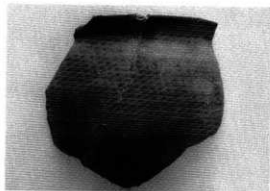
19



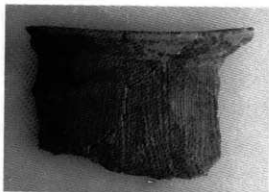
20



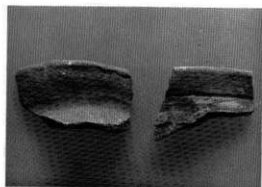
21



22



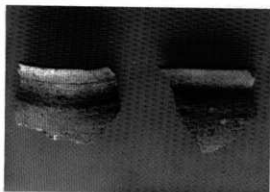
23



古免遺跡出土遺物 (第13・14図)

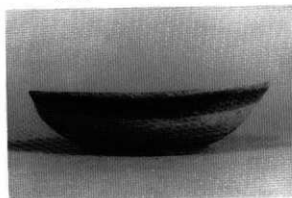
24

25

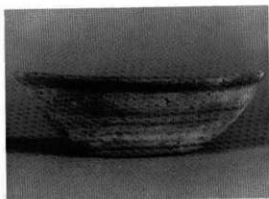


26

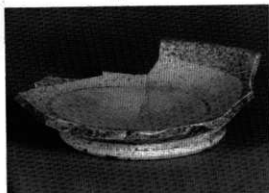
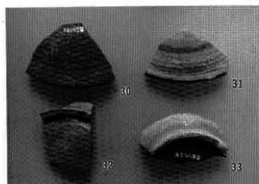
27



28



29



34

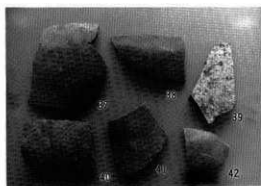


35



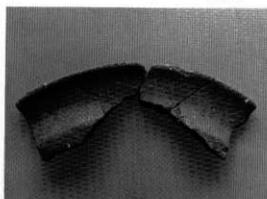
35

34

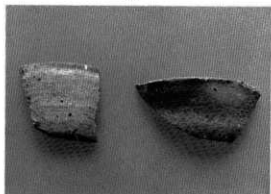




43



44



45

46



47



48

49



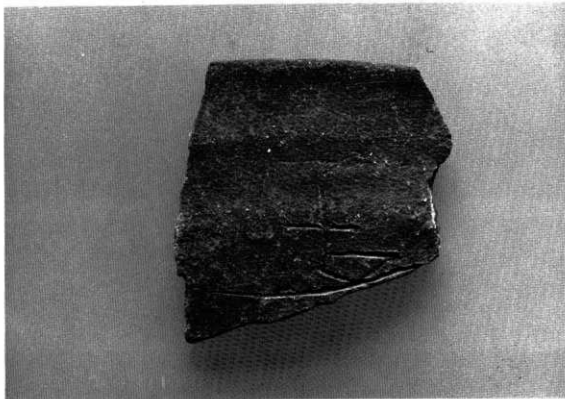
50



51



52



1 線刻を有する土師器杯 (第15図51)



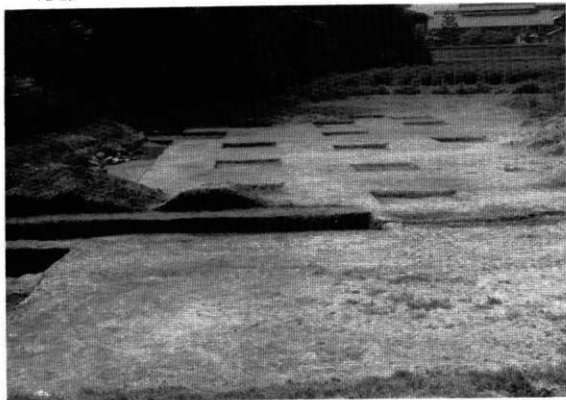
2 線刻を有する土師器甕 (第15図52)



1 芝宮道跡遠景（西から）



2 芝宮道跡遠景（北から）



1 芝宮遺跡発掘状況（北から）



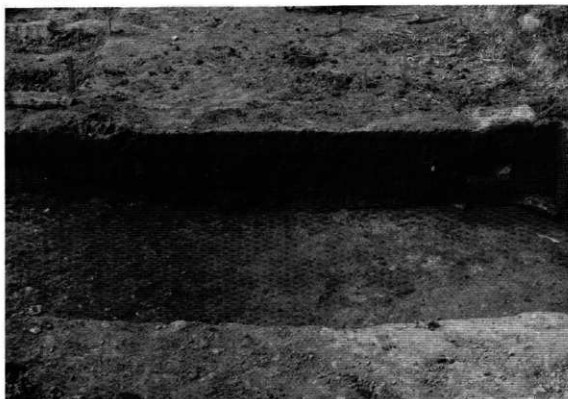
2 芝宮神社



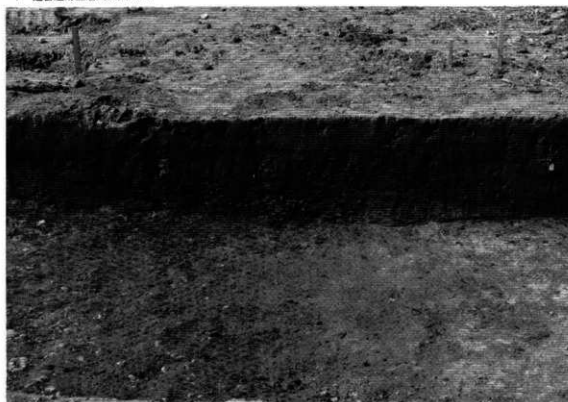
1 土屋検出状況（北から）



2 土屋検出状況（南から）



1 芝宮遺跡土層断面図 (A)



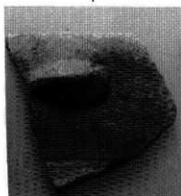
2 芝宮遺跡土層断面図 (B)



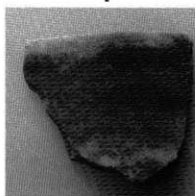
1



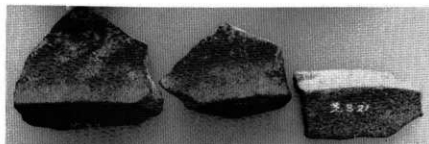
2



3



4



5



芝宮遺跡出土遺物 (第18回)

6

古免遺跡

芝宮遺跡

——長野県小県郡丸子町古免・芝宮遺跡発掘報告書——

平成元年3月31日 発行

編集 昭和63年度丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団

発行 丸 子 町 教 育 委 員 会

〒386-04 長野県小県郡丸子町大字丸子1592の2

TEL 0268 (42) 3147

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381 長野市西和田470

TEL 0262 (43) 2105
